



令和6年度 大学等を通じたキャリア形成支援による
幼児教育の「職」の魅力向上・発信事業

幼児教育の「職」の魅力向上と

人材確保の好循環を生み出す

モデル創出事業

事例パンフレット

はじめに

本事業の概要

幼児期及び幼保小接続期における教育の質を支える幼稚園教諭・保育教諭(以下「幼稚園教諭等」という)の確保・定着は喫緊の課題です。より多くの人材が幼児教育の道を志し、就職後も継続的にキャリアを高めていくために、幼稚園教諭等の養成課程を有する大学等においては、これまで蓄積してきたノウハウも活用しつつ、入学前から就職後まで総合的なキャリア形成支援に取り組む役割が期待されています。

本事業では、幼児教育の「職」の魅力向上と人材確保の好循環を生み出すモデル創出を目的とし、公募により、効果的な事業を提案する大学等の事業を8件採択しました。具体的には、大学入学前からの幼児教育の魅力発信や、学生・卒業生のキャリア支援、一度現場を離れた幼稚園教諭免許状の保有者が現場復帰しやすくするための支援などについて、先進的なモデルを創出し、効果的なキャリア支援の在り方や、幼児教育の魅力発信のアプローチ方法に関する調査研究を行いました。

本パンフレットでは、各大学にて実施した取組のうち、特に効果のあった取組や特色ある取組について、その概要、成果、課題等を掲載しています。

事業内容

8件の採択大学は、下記4テーマにわたって、地域や大学の実情に応じて、それぞれの持つ強みや特色等も生かして取組を実施しました。また、令和5年度の本事業で得られた成果等をも踏まえ、それを更に発展させる取組や、新たな切り口からの支援等を行う取組、自治体及び他大学とも連携した取組を積極的に実施しました。

①小中高生を対象とした職の魅力発信

幼児教育に携わる人材の将来的な裾野を広げるため、小中高生を対象に幼児教育の現場の魅力を発信するとともに、幼稚園教諭等の職業イメージの形成を図る。

②養成校生を対象としたキャリア形成支援

幼稚園教諭等の養成課程に所属する学生が、近い将来に現場で活躍できるイメージを持てるよう、なりたい幼稚園教諭像やキャリア観を形成するとともに、就職にあたっての不安感の軽減に資する取組を行う。

③現職教諭・離職者等を対象としたキャリア形成支援

それぞれの立場に応じた研修機会の提供等を通じて、幼稚園教諭等に対しては現場への定着を図るとともに、離職者に対しては円滑な現場復帰を促進する。

④その他

①～③のほか、幼児教育の「職」の魅力向上と人材確保の好循環を生み出す観点から、幼稚園教諭を目指す人材の確保のために特に効果が見込まれる先導的な取組。

本パンフレットの使い方

本パンフレットでは、本事業に採択された地域の幼児教育を担う人材を輩出する大学等8校のそれぞれが実施した取組を、取組の対象や手法ごとに分類して掲載しています。下記では「本事業での取組・成果紹介」ページの見方を記載しています。参考となる取組内容に是非とも目を通していただき、今後の活動の一助としていただければ幸いです。

- 出前授業** 小中高生に対する講義や模擬授業等の「職」の魅力を伝える取組(幼児と交流する体験を除く)
- 職場体験** 小中高生に対し、幼児と実際に交流する機会を提供することで「職」の魅力を伝える取組
- 教育・保育実習** 養成校生に対し、幼児教育・保育職に就くために実践的に学ぶ機会を創出する取組
- 多層型交流会** 小中高生、養成校生、現職者(OB・OG)の二層以上が会話・交流する機会を提供する取組
- 研修・講演会** 現職者・離職者に対し、改めて幼児教育職の魅力ややりがいの再発見を促す取組
- 就職支援** マッチングや相談会等、自分に合った就職先を探すための取組
- 周知広報** パンフレット、チラシ、ウェブサイト等を作成し、それらを用いて「職」の魅力を発信する取組
- ICT・デジタル活用** ウェブサイト、SNS以外のデジタルプラットフォーム等を活用し、「職」の魅力を発信する取組
- 地域連携** 周辺自治体・行政及び教育機関と連携した取組

※「地域連携」を含む取組に関しては、上記の「地域連携」以外のジャンルに付随して併記しています。

ICT・デジタル活用

小中高生
養成校生
現職者
離職者

教育・保育体験プログラム (幼児教育・保育ICT講座、わくわくさんの工作体験)

札幌国際大学・札幌国際大学短期大学部

課題背景

中高校生には主に子供と関わる楽しさを体験すること、幼稚園教諭等を目指す学生や現職者、離職者には幼児教育・保育現場にICTを導入することで、幼児教育・保育をより楽しくする工夫や業務の軽減につながるということを体験してもらうことを目的として開催した。特に幼児教育・保育現場にICTを活用し、もっと幼児教育・保育を面白くする方法を学ぶことで、幼児の体験を豊かにすることにつながることを考えた。

取組概要

- ▶(幼児教育・保育ICT講座)講師として教育におけるICT活用を研究している研究者を招き、幼児教育を豊かにする活用法についてワークショップを開催した。
- ▶(わくわくさんの工作体験)わくわくさんを講師に招き、中高校生と子供と一緒に工作活動をした。現職者などは見学および交流を行った。

参加者・役割

(幼児教育・保育ICT講座)
高校生(3名)、保護者(1名)、現職者(13名)・受講者
(わくわくさんの工作体験)
中高校生(中学生3名、高校生29名)、現職者(54名)・受講者、養成校生(6名)・受講者

実施時のポイント

- ▶iPadを貸出し、実際に参加者一人一人が体験できるようにした。
- ▶子供の体験としてICTを活用することで体験が豊かになるという視点と、幼稚園教諭等の業務としてICTを活用することで業務の軽減の2つの視点からのワークショップとした。
- ▶幼稚園教諭等の業務の負担軽減では、生成AIを使用することで、発表会の曲作りなどが簡単にできることが紹介された。

- ▶中高生の体験と幼稚園教諭等が活動を見学し、わくわくさんとの質疑応答でどちらによっても有意義な体験となるように企画した。

実施時の課題

- ▶中高生の多くの参加者を募集するために、幼稚園教諭等を志望している中高生の裾野を広げることが課題である。札幌市内、近郊の中学校、高校にチラシを配布したが中高生の参加は伸びなかった。
- ▶現職者は、昨年14SNSでの発信だけだったものを今年度は各園にチラシを送ったことで参加者が多かった。中高生の参加者を増やすことについては課題が残ったが、現職者については、チラシの配布が有効である。

効果検証の手法

参加者アンケート：中高校生、現職者

体制

大学：イベント企画、運営、チラシ作成・配布、運営補助の学生の管理
養成校生：運営補助

コスト

幼児教育・保育ICT講座：約2万、わくわくさんの工作体験：約70万円

取組の対象

特にターゲットとしている層を示す図

取組の名称、実施した大学

課題背景、取組概要

ICT・デジタル活用

保育体験プログラム(保育ICT講座、わくわくさんの工作体験)

札幌国際大学・札幌国際大学短期大学部

スケジュール・Schedule

	6月	7月	8月	9月	10月	11月
企画・イベント設計			▶			
学生スタッフ募集					▶	
登壇者選定・依頼						▶
教材準備				▶		
参加者集計					▶	
わくわくさんの工作体験						▶
ICT活用講座						▶

成果・Results

成果／見えてきた課題

(幼児教育・保育ICT講座)

- ▶アンケートにおける満足度では「満足」が約76%、「ほぼ満足」が約24%であった。
- ▶良かった点「幼児教育・保育現場に活用できる」「自分では気づけなかったさんのアイデアを知ることができたから」
- ▶1時間半は時間が足りず、タイムスケジュールの再設計が必要。

(わくわくさんの工作体験)

- ▶中高生の参加者全員が、体験後に幼児教育・保育に対する興味・関心が増した。
- ▶幼稚園教諭等の参加の仕方として見学という形であったが、幼稚園教諭等も工作に参加したいという希望が多かったため、今後の課題として残った。

展開案

(幼児教育・保育ICT講座)

- ▶参加者アンケートにおける「今後もこのようなイベントに参加したい」約90%
- ▶ICTの活用のような新しい分野のイベントの参加者が見込まれる。

(わくわくさんの工作体験)

- ▶参加者アンケートにおける「今後もこのようなイベントに参加したい」約97%
- ▶中高校生は子供と関わり、現職者は幼児教育・保育の学びになることが多くあるということで、今後も多くの参加者が見込まれる。

成果物・Deliverables

- ▶広報用チラシ：近隣中学、高校、こども園、幼稚園に配布。さほあみ(札幌市保育人材支援センター)ウェブサイト掲載
- ▶プレスリリース記事
▶<https://yoyodanewsprwire.jp/press/release/preview/202410299010/2997U7V36zI7>



幼児教育・保育ICT講座では、幼児の体験強化業務負担改善の方法を講義した。わくわくさんの工作体験にて、幼児と工作体験を通して、幼児と交流する体験をした。

詳細

参加者・役割、実施時の課題・ポイント、効果検証の手法、体制、コスト、スケジュール、実施の様子など

成果・成果物

効果検証の結果及び今後の展開案、成果物など



目次

はじめに

- 本事業の概要・事業内容 2
- 本パンフレットの使い方 3

目次・採択大学紹介

- 目次 4
- 採択大学紹介 5

本事業での取組・成果紹介

- 出前授業 6
- 職場体験 15
- 教育・保育実習 18
- 多層型交流会 25
- 研修・講演会 32
- 就職支援 41
- 周知広報 44
- ICT・デジタル活用 49

おわりに

- 総括・本事業主査からのコメント 58

採択大学紹介

- 01 札幌国際大学・札幌国際大学短期大学部
未来を育む幼児教育・保育体験
- 02 和洋女子大学
地元で「学ぶ・続ける」幼児教育
—ライフステージに合わせたアプローチ—
- 03 國學院大學
人と人とのつながりを大切にした
多層型幼児教育人材育成・専門性向上プロジェクト
- 04 東京学芸大学
魅力がこだまする幼児教育・保育職Echoモデルの開発
- 05 大阪青山大学
幼児教育の魅力伝えたい!
- 06 大阪教育大学
多層型交流によるキャリア支援ネットワークの構築
- 07 大阪キリスト教短期大学
教育テックを活用した養成校連携モデル構築事業
- 08 鳴門教育大学
「職」の魅力向上と人材確保の好循環を生み出す
モデル創出事業



出前授業

小中高生に対する講義や模擬授業等の
「職」の魅力を伝える取組
(幼児と交流する体験を除く)

掲載事例

- P7-8 **体験授業・出前講座**
和洋女子大学
- P9-10 **幼児教育の魅力とキャリア形成に関するシンポジウム**
大阪青山大学
- P11-12 **地域と連携した出前授業からの発信**
大阪教育大学
- P13-14 **出前授業「保育者ほど素敵な仕事はない」
オープンキャンパス「遊びのワークショップ」**
鳴門教育大学

体験授業・出前講座

和洋女子大学

課題背景

幼児教育の重要性や幼稚園教諭等の実践的な側面を紹介し、養成校生との交流を通じて幼児教育の実体や職業イメージを具体的に持つ機会を提供することで高校生の幼児教育職への関心を高める必要がある。

取組概要

地域の中高生と養成校生を対象に、幼児教育の魅力を伝えるための体験授業・出前授業・見学会を実施した。

参加者・役割

【体験授業】

〈オープンキャンパス〉高校生(57名):受講者
 〈幼児教育・保育体験授業〉養成校生(57名):受講者
 〈体験授業〉高校生(68名):受講者
 〈大学見学会〉近隣高校(5校)、近隣中学(1校):受講校

【出前授業】

近隣高校(5校):受講校

実施時のポイント

- ▶ 体験型プログラムの導入により、実際の授業や幼児教育・保育体験を通じて、幼児教育の魅力を具体的に伝えた。
- ▶ 高校生一人ひとりの疑問に丁寧に対応し、進路選択をサポートした。
- ▶ 在学生との交流の機会を設け、養成校生との対話を通じ、リアルな学びや将来のイメージを明確にできた。
- ▶ 施設見学の実施を通じて学びの環境や教育内容を実際に体感できる機会を設けた。
- ▶ 参加者アンケートを分析し、収集したデータを次年度以降のプログラム改善に活用する。

実施時の課題

- ▶ 高校生だけでなく、小・中学生など幅広い層を対象としたプログラムの検討が必要。
- ▶ 動画、SNSを活用し、より多くの参加者を集めるための、広報活動の強化や工夫が必要。
- ▶ 参加者のニーズに応じた多様なプログラム(オンライン授業等)の導入を検討する必要がある。

効果検証の手法

参加者アンケート 対象者:高校生、養成校生

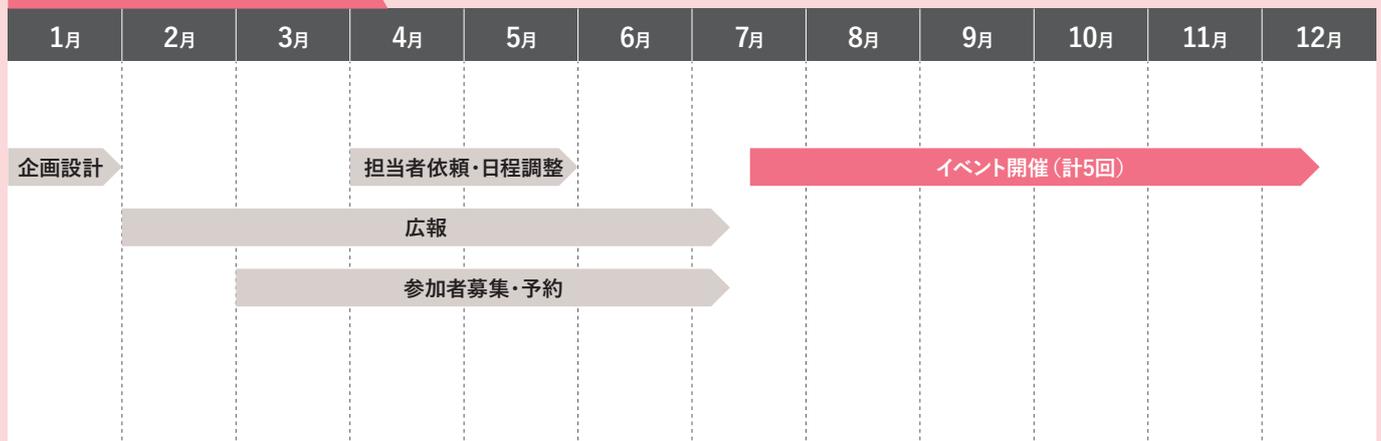
体制

大学: イベント企画、運営、広報
 教員: 講義、体験授業の実施、進行
 養成校生: 体験授業サポート、交流担当
 近隣中学・高校: 参加生徒の募集
 地方公共団体: 施設利用の支援

コスト

出前授業: 1万円~2万円/回
 体験講座(オープンキャンパス): 3万円~

スケジュール・Schedule



成果・Results


成果／見えてきた課題

- ▶ 体験授業参加者アンケートにおいて「幼児教育への関心を高めた」との回答が約90%得られた。
- ▶ オープンキャンパスでの体験授業参加者アンケートにおいて「とても満足」「満足」との回答が約100%得られた。
→ 幼児教育・保育体験に参加した養成校生は子供の理解を深め、専門的な学びに対する課題を発見し、学ぶ意欲の向上が確認された。
- ▶ 参加者の層が高校生に偏っており、小中学生などへのアプローチが課題であることが明らかになった。
- ▶ 集客面では、広報用の動画・SNS活用などの戦略強化が求められる。


展開案

- ▶ 小中学生などの幅広い層を更に増やし、幼児教育への関心を早期に喚起する。
- ▶ 動画を活用して広くイベントを周知することで、一般的な幼児教育職に対するネガティブなイメージの低減が期待できる。
- ▶ 広報活動を強化し、参加者数の増加を目指す。
- ▶ 地域の幼児教育施設と連携し、継続的に、より実践的な学びの機会を提供する。

成果物・Deliverables

- ▶ 大学ウェブサイト記事
<https://www.wayo.ac.jp/>



体験講座にて、参加者へ向けて養成校生が説明している様子

幼児教育の魅力と キャリア形成に関するシンポジウム

大阪青山大学

課題 背景

令和5年度大学等を通じたキャリア形成支援による幼児教育の「職」の魅力向上・発信事業にて「同窓生の現職幼稚園教諭による講話および養成校4年次生との交流」を行ったところ、「就職に対する不安が少し軽減された」、「勤務年数の違いによる異なるアドバイスが聞けて良かった」等の意見があった。一方、「同性の教諭からの話を聞き交流したい」という意見もみられたため、今年度は多様なキャリアを持つ現職幼稚園教諭との交流イベントを実施した。

取組 概要

現職幼稚園教諭(OB・OG)を招へいし、「幼児教育の魅力とキャリア形成に関するシンポジウム」を開催し、聴講した高校生・養成校生・シンポジストの交流会を実施した。

参加者・役割

幼稚園教諭(4名):登壇者
 高校生(1名):受講者
 養成校生(32名):受講者
 幼児教育・保育関係者(1名):受講者
 保護者、その他(各1名):受講者

実施時のポイント

- ▶同窓生のネットワークを活かし、多様なキャリアの現職の幼稚園教諭を招へいした。
- ▶就職を控えた4年生の「教職実践演習」を同時開講し、幼稚園教諭としてのキャリア形成を自分事として捉えられるように工夫した。
- ▶大学祭やプレオープンキャンパスと同日開催としたことで、高校生や保護者にも訴求した。
- ▶シンポジウムと交流会の前後で同窓生同士や本学教員と会話をすることで、リカレント教育の一環としての機能を持たせた。

実施時の課題

- ▶イベント参加者募集のため、告知のチラシを作成・配布すると同時に、大学SNSを介して情報発信を行った。
- ▶中高生が養成校生や現職幼稚園教諭とスムーズに交流できるよう、参加者の状況を踏まえ、交流会のグループ分けを実施した。
- ▶養成校生が主体的に交流会を進めることができるよう学生自身が各グループのファシリテーション役を務めた。
- ▶養成校生が幼児教育の魅力を再確認し自身のキャリア形成をより確かなものとするため、事前課題(質問事項)を提示した。

効果検証の手法

受講者アンケート:高校生、養成校生

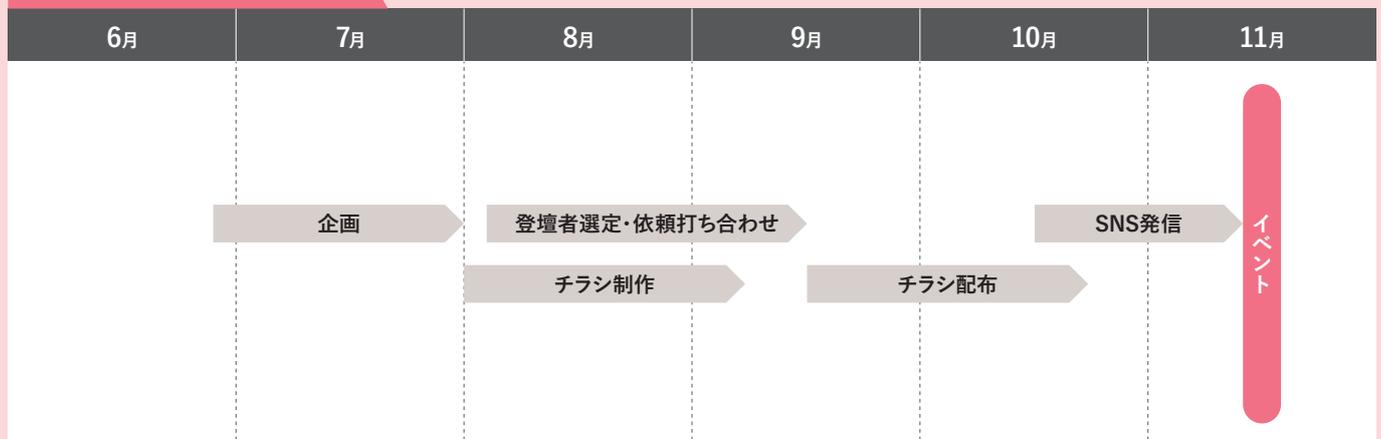
体制

子ども教育学部:イベント企画・運営・SNS発信
 現職者(OB・OG):シンポジスト登壇
 箕面市教育委員会:市内中学校への広報協力
 入試部:広報(チラシ)協力

コスト

約4.7万円(広告費除く)

スケジュール・Schedule



成果・Results


成果／見えてきた課題

- ▶ シンポジウムと交流会のアンケートにおいて、「とても良い」「まあまあ良い」との回答が約90%、シンポジウムを経て幼児教育のイメージが「ポジティブに変化した」との回答が約83%であった。
- ▶ プレオープンキャンパスとの同日かつ長時間の開催となったため、想定以上の集客につながらなかった。
- ▶ 中高生のイベント参加につなげるため、チラシ配布だけではなく、さらに踏み込んだ広報活動を検討する必要がある。


展開案

- ▶ 連携高校へ個別にイベント開催を告知することで、幼稚園教諭等志望者へより強く訴求する。
- ▶ 大学祭・オープンキャンパスのメインイベントとして開催し、大学祭やオープンキャンパスの集客との相乗効果をねらう。
- ▶ 大学祭・プレオープンキャンパスの運営事務局と連携して大学祭パンフレット等にもイベント情報を掲載し、当日の来場者にも広く訴求する。

成果物・Deliverables

- ▶ 広報用チラシ(近隣中学・高校に配布)
- ▶ アンケート調査結果
- ▶ パンフレットへの掲載
- ▶ 【公式】大阪青山大学子ども教育学科TikTok
https://www.tiktok.com/@osaka_aoyama.kodomo
- ▶ 大阪青山大学YouTubeショート
<https://www.youtube.com/@%E5%A4%A7%E9%98%AA%E9%9D%92%E5%B1%B1%E5%A4%A7%E5%AD%A6-v2e/shorts>



シンポジウムにて現職幼稚園教諭のOB・OGが体験談を講演

地域と連携した出前授業からの発信

大阪教育大学

課題背景

幼稚園教諭等の処遇改善について、メディア等でも報じられているものの、かえって幼児教育・保育職の勤務待遇が低いというイメージを広げてしまっている面もある。実際には楽な仕事ではないものの、やりがいや醍醐味に溢れ、教師冥利に尽きる経験が数多く存在する。このような魅力を地域に広く伝えるため、養成校のない飛騨地域において、他の養成校と連携して出前授業(交流)の取組を実施した。

取組概要

- ▶ 養成校生と公立幼稚園長などが岐阜県内の会場で交流した。
- ▶ シンポジウムや交流会を実施し、高校生やその保護者に進学や就職に関する見通しを伝え、養成校生も自覚や自信を深めた。

参加者・役割

幼児、小学生、中学生(計約20名):受講生
高校生(計64名):受講生
保護者及び地域の方(7名):シンポジウム聴講者
養成校生(計21名):運営補助、交流会参加

実施時のポイント

- ▶ チラシの配布、地域版新聞への掲載、ウェブサイトでのシンポジウムの動画の共有などを通じて、養成校生、幼稚園教諭等をはじめ幅広く発信。
- ▶ 本取組の中の積み木を活用した交流は、協働している岐阜市内園の園長の「科研費(奨励研究)」応募につながった。
- ▶ 本取組の中の規格外野菜を活用した岐阜県内高校と大阪府内の園のネットワーク形成が、高校教諭の教職大学院受験につながった。

実施時の課題

- ▶ 大阪と名古屋と岐阜という広域での交流のため、予算、旅費や謝金支給の手続が多かった。
- ▶ また、上記の作業をごく少人数で行ったところ作業が集中したため、継続する場合はスタッフ側の体制の検討が必要。
- ▶ 関係者の都合や体調不良等により、いくつかの日程が影響を受けた。

効果検証の手法

養成校生へのアンケート
出前授業実施先の高校1年生の「保育系列」志願者数

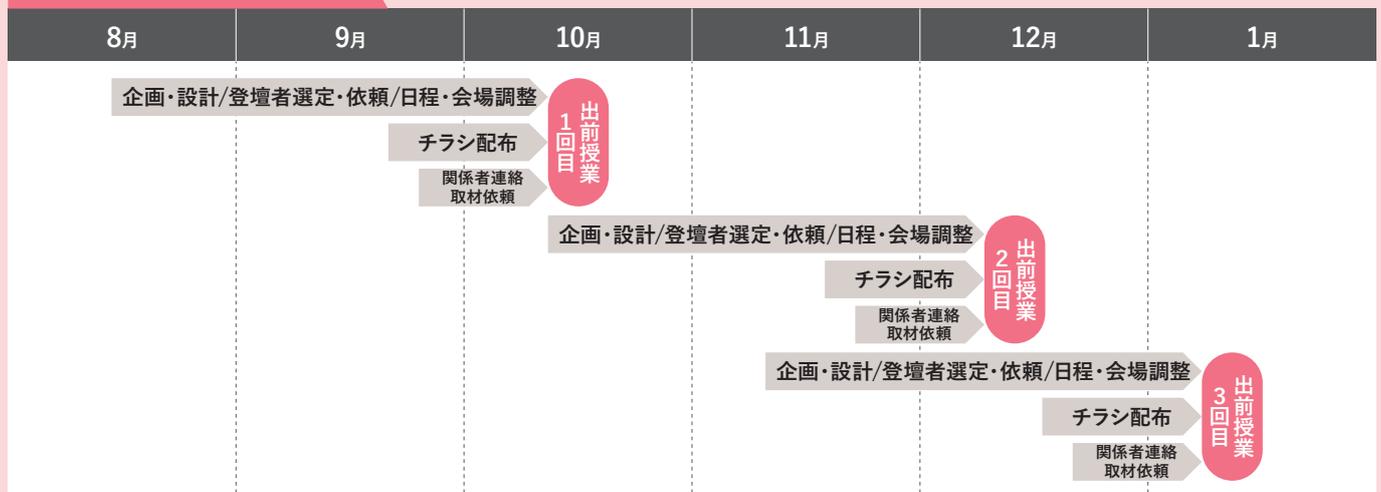
体制

大学: イベント企画・運営
幼稚園、保育園、こども園: 登壇者連携協力
地元高校、教育委員会、市役所・NPO法人: 広報協力
地元新聞社: 取材協力

コスト

約215万円

スケジュール・Schedule



成果・Results

成果／見えてきた課題

- ▶ 高山市と下呂市の3つの高校から高校生と保護者の参加があった。また市内のイベントと共催することで、幼児から高校生まで幅広い年齢層の参加が得られた。養成校生もイベントの企画・開催に主体的に関与することで、幼児教育の魅力を発信する自信をつけた様子が見えてくる。
- ▶ 実施先高校の総合学科1年生の「保育系列」志願者数は11名であった。3年生14名・2年生9名と比較してやや持ち直したと言える。来年度の数に関しても増加を期待している。

展開案

- ▶ 大阪-岐阜間で何度も交流をすることは予算的に難しいが、今年度のつながりを活かしたオンラインでの交流を検討中。
- ▶ 愛知県、岐阜県内養成校の協働と大阪府内養成校の協働をそれぞれ立ち上げ、相互連携を計画・調整中。
- ▶ 大阪府内の園と下呂市内の園の短期人材交流を検討中。高校生や養成校生のキャリアのみならず、幼稚園教諭等や高校教諭のキャリアの充実にもつなげていく。

成果物・Deliverables

- ▶ 広報用のチラシ
- ▶ 新聞記事
- ▶ 講演の録画ビデオ(今後ウェブサイトにて公開予定)



発達障害を抱える園児も楽しめる積み木とビー玉遊びを体験する養成校生

出前授業「保育者ほど素敵な仕事はない」 オープンキャンパス「遊びのワークショップ」

鳴門教育大学

課題背景

幼稚園修了時の「将来してみたい仕事」では、「ようちえんのせんせい」は女兒の上位に位置づいているが、大学進学時にその割合は低下している。小学校高学年からの幼児教育・保育体験の機会提供や幼児教育の意義等に関する出前授業の実施を通じて、幼児教育に関わる人材の質的向上の重要性や「職」の魅力を発信することにより、幼稚園教諭等を目指す学生の裾野を広げる。

取組概要

- ▶ ハンドブック『ようちえんで 待ってるよ!』を活用した出前授業と幼児教育・保育体験
- ▶ オープンキャンパス等を活用した小中高生向け模擬授業や個別相談、多層型交流支援

参加者・役割

- 【一日鳴教生】高校生(8名):参加者
- 【遊びのワークショップ】高校生(96名)、保護者(12名):参加者
- 【出前授業】小学生(6年生18名)、中学生(3年生48名)、高校生(1、2年生42名):受講者

実施時のポイント

- ▶ 出前授業の模擬体験などで幼児教育の専門家としての知識や幼児教育技術といわれる指導のスキルを見せて説明することが、児童・生徒たちの幼児教育への理解や憧れを促すことはいうまでもない。
- ▶ この中で「環境を通して行う教育」と「遊びを通して行う総合的指導」の実際を目の当たりにしてもらうことが幼児教育の「職」の魅力を発信するときの基本となると考えた。さらに、出前授業で体感した幼児教育の楽しさや躍動感、テキストとして配布したハンドブック『ようちえんで 待ってるよ!』を何度も開くことで継続させる。
- ▶ 幼稚園教諭等の身分や仕事内容、やりがいや誇りなどをデータや漫画を通して目にするすることで、「もっと詳しく知りたい、聞いてみたい」が生まれてくるようにする。

実施時の課題

- ▶ 「楽しい、興味深い仕事」という入り口から、学校教育としての連続性を踏まえた幼稚園教諭等の魅力に到達できるようなプログラムにする。
- ▶ 児童・生徒たちの背後にいる保護者に向けても幼稚園教諭等の仕事の社会的重要性と価値を発信していけるよう、ハンドブックを家庭に持ち帰り、家庭での話題にも高まるように工夫する。

効果検証の手法

参加者アンケート

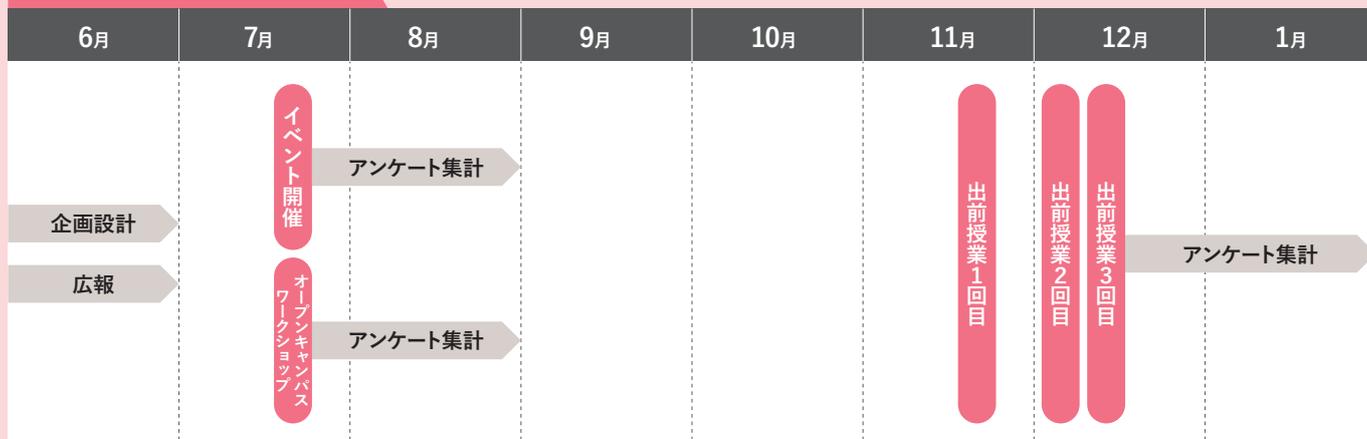
体制

大学:企画運営、ハンドブック作成、メタバース構築による広報
県内連携団体(県内中学、県内高等学校、全国国公立幼稚園長会、私立幼稚園連盟等、協議会):広報協力

コスト

約2万円(ハンドブック使用分)

スケジュール・Schedule



成果・Results


成果／見えてきた課題

- ▶ 高校生向けアンケートにおいて、幼児教育の目的の理解「とても当てはまる」との回答が約7割以上得られた。
- ▶ 小中高生向けアンケートにおいて、幼稚園教諭等の仕事内容の具体的な理解について「とても当てはまる」との回答が約9割(小学生)、約7割以上(中高生)得られた。
- ▶ 環境を通して行う教育への理解「とてもあてはまる」との回答は約7割得られ、高校生が最高値であった。
- ▶ 全体向けアンケートにおいて、遊びを通して行う総合的な指導についてのイメージ「とても当てはまる」との回答が約6割以上得られた。
→ハンドブックの中の子供と共に遊ぶ幼稚園教諭等の指導を描いた漫画も理解の一助になっていると考えられる。
今後も、重要な事柄をいかに分かりやすく発信するかの工夫を検討していく。


展開案

- ▶ 令和5年度大学等を通じたキャリア形成支援による幼児教育の「職」の魅力向上・発信事業から実施している職の魅力発信イベント「保育者ほど素敵な仕事はない」への参加自治体の中で、兵庫県伊丹市、徳島県吉野川市・藍住町等々「本取組に倣い、自分たちの市・町での幼稚園教諭等確保のために、小中学生から幼児教育・保育の魅力に触れる事業を展開したい」という自治体や教育委員会が増加。
- ▶ 今後は、本事業において培ったノウハウとテキストを活用し、徳島県内外の地方公共団体や教育委員会と連携した事業の広域展開を目指す。

成果物・Deliverables

- ▶ ハンドブック
『ようちえんで 待ってるよ!』
- ▶ ハンドブック第2弾
『ようちえんで がんばってるよ!』



制作ハンドブック『ようちえんで 待ってるよ!』を活用した出前授業を実施



職場体験

小中高生に対し、
幼児と実際に交流する機会を提供することで
「職」の魅力を伝えるための取組

掲載事例

P16-17 **幼児との交流遊び体験授業**
東京学芸大学

幼児との交流遊び体験授業

東京学芸大学

課題背景

近年、少子化や核家族化が進み、中学生が幼児と関わる機会が減少している。中学校家庭科の授業で「保育」の単元があるが、実際の幼児の姿を見たり関わったりする機会はもちにくいという現状がある。

取組概要

- ▶ 幼稚園教諭による家庭科の授業の計画・実施
- ▶ 中学生と幼児の交流授業の計画・実施

参加者・役割

附属中学校(3年生4クラス 計139名):受講者・参加者
 附属幼稚園(2学級 計58名):参加者
 附属中学校家庭科教員(1名):講師
 附属幼稚園教諭(1名):講師

実施時のポイント

- ▶ 家庭科の単元「幼児の生活と家族」の学習が進み、子供の発達等について生徒が学んだのちに、幼稚園教諭がゲストティーチャーとして授業を行った。実際の幼児の姿を動画や写真で見せながらエピソードを話した。
- ▶ 生徒が幼児を身近に感じられるよう、服のサイズや手の大きさ等を自分と比べられるような機会を設けた。小ささを感じると同時に自分の成長に気付く機会とした。
- ▶ 園の環境の下、実際に幼児とかかわる時間を設けた。自由に幼児の遊びに入り、見たり会話をしたりして幼児の実態を知れるようにした。初回は自由に関わり、2回目は生徒が遊びを企画した。

実施時の課題

- ▶ 授業時数に決まりがあり、幼稚園の生活時間と合わせての授業枠の確保が難しかった。
- ▶ 交流に関心のある生徒や幼児と、もちにくい生徒や幼児がいる。授業で行うため、どちらにとっても意味のある交流を計画する必要がある。

効果検証の手法

事前・事後アンケート:参加者中学生

体制

附属中学校:家庭科教員派遣、アンケートの実施
 附属幼稚園:授業・交流受け入れ

コスト

約3000円

スケジュール • Schedule

7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月
幼稚園教諭の家庭科授業							
			交流会1回目			交流会2回目	

成果 • Results

成果／見えてきた課題

- ▶ アンケートは生徒131名が回答。自由記述の結果を、①幼児のイメージ②意外なこと③自分の幼少期を振り返る④幼稚園教諭等の仕事のイメージ⑤今後の期待の5つに分類した。
 - 事前に授業を行ったことで、幼児へのイメージだけでなく幼稚園教諭等の仕事についての記述も見られた。
 - 約半数以上(73名)に「③自分の幼少期を振り返る」記述が見られた。
 - 記述には肯定的なことが多く書かれており、幼児や幼児教育職へのプラスのイメージがうかがえた。
- ▶ 幼児と関わって「楽しかった」で終わらず幼児教育職への魅力につなげていくことが課題として挙げられる。

展開案

- ▶ 幼稚園、中学校にとって互いに無理のない計画を立て、実施する。
- ▶ 幼児教育職に興味をもった生徒に対し中学校教員と連携し、キャリア教育としての場を開く。

成果物 • Deliverables

- ▶ パンフレット掲載



幼稚園教諭による家庭科での授業を経て、中学生が実際に幼児と交流している様子



教育・保育実習

養成校生に対し、
幼児教育・保育職に就くために
実践的に学ぶ機会を創出する取組

掲載事例

P19-20 **幼児教育施設と連携したカリキュラム
「現場での学び」**

和洋女子大学

P21-22 **パパ・ママ体験プロジェクト
～大学生の子育て・家庭訪問**

東京学芸大学

P23-24 **小学生にも魅力を伝えたい！
夏休み講座『かけっこ教室』**

大阪青山大学

幼児教育施設と連携したカリキュラム 「現場での学び」

和洋女子大学

課題背景

子供を取り巻く社会状況が大きく変化する中で、乳幼児期の幼児教育・保育の質の向上が、持続可能な社会に向けて社会経済的にも重要な課題となっている。ニーズに伴い幼児教育・保育の場や業務が多様化し、幼稚園教諭等に求められる専門性が多岐にわたることから、養成課程で得られた知識・技術を再構成する理論と実践との往還的な学びの機会を、実習教育に加え柔軟に確保していく必要がある。

取組概要

地域の幼児教育・保育現場との連携を通じて、学生と子供とのより日常的な出会いの場の創出を試みる。学生自身が主体的に参加、活動し振り返り改善する幼児教育・保育の実践過程を現職幼稚園教諭等と協働して実施することで、双方の資質・能力の向上を図る。

参加者・役割 養成校生(計65名):参加者

実施時のポイント

- ▶市川市と様々な形で独自に連携してきた幼稚園教諭等の経験をもつ実務家教員4名が、その関係構築の実績を活かして幼児教育・保育現場と連携し、協働して養成教育の質向上を図った。
- ▶養成校生が希望する幼児教育・保育実践を選択・実現することを尊重し、実務家教員が助言をしたり、連携協力園との調整を図ったりした。
- ▶可能な限り異学年混成のグループ分けとし、交流できるようにした。
- ▶幼児教育・保育実践に協力した幼稚園教諭等と養成校生が、幼児教育・保育実践後に一緒に幼児教育・保育実践の動画視聴をしながら振り返りを行った。

実施時の課題

- ▶養成校生の授業スケジュールの関係上、連携協力園との日程調整が困難な場合があった。
- ▶幼児教育・保育実践後に実施する幼稚園教諭等と養成校生の振り返りの際、幼稚園教諭等の参加が限られてしまった(幼稚園教諭等が慌ただしい時間になるため、など)。

効果検証の手法 養成校生:事前・事後意識調査アンケート
連携協力園幼稚園教諭等:事後意識調査アンケート

体制 大学:研究、企画、運営、当日引率
市川市内の公立幼稚園・公立保育園:連携協力園、広報(チラシ)広告

コスト 80万円(使用機材、玩具、移動費、制作材料費等)

スケジュール・Schedule

5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月
市川市との 相談・連携			幼児教育・保育実践1回目			幼児教育・保育実践2回目		保育実践報告会
養成校生への 打診			参加養成校生 への説明会					

成果・Results

成果／見えてきた課題

- ▶ 養成校生へのアンケートにて、学年に関係なく「子供と楽しく関わられた」「幼児教育・保育の学びに役立つと思えた」といった声が寄せられた。子供や幼稚園教諭等の関わりを安心してできるようになるなど、幼稚園教諭等との振り返りや交流から多くの学びが得られた。異学年交流により幼児教育・保育のイメージの変容があった。
- ▶ 幼稚園教諭等へのアンケートにて、教員、養成校生との交流から「実習生の指導の参考になった」との回答があった。緊張せず楽しく取り組んでいる学生の姿から、幼児教育・保育を学ぶ学生に対する考え方の変容があった。
- ▶ 養成課程のプログラムとして準備を整えることは、実現することの難しさや養成校教員の備えるべき資質・能力の要件という意味でも課題の一つといえる。

展開案

- ▶ 次年度は市川市内の私立の幼児教育・保育施設への依頼を実施していく。
- ▶ 2年目の取組になることから、幼児教育・保育実践のバリエーションを広げ、更に学生がしてみたい幼児教育・保育実践を実現できるようにしていく。

成果物・Deliverables

- ▶ 保育実践プロジェクト成果報告書
- ▶ 日本保育学会
第78回大会ポスター発表(予定)



養成校生が読み聞かせを行う様子



養成校生の主体性を尊重した実習カリキュラムとした

パパ・ママ体験プロジェクト ～大学生の子育て・家庭訪問

東京学芸大学

課題背景

大学生が育児や子育てにふれる機会はほぼなく、将来やキャリアイメージを描く際に育児や子育てに関するイメージがわからない様子が見られる。幼稚園教諭等を志す大学生にとって、実習以外の場面で子供と自然に関わる体験や保護者と接する機会を設けることで職のイメージ向上や負担感の軽減、自信につながるのではないかと。

取組概要

- ▶ 「幼児の遊びと玩具」「家庭教育・育児」「家庭訪問における注意点」に関する講義と事前学習の実施。
- ▶ 養成校生がパパ・ママ体験(子育て家庭訪問)を実施。
- ▶ 実施後には、パパ・ママ体験の報告座談会を開催。学生と訪問先家庭及び識者で振り返りを実施。

参加者・役割

養成校生(1年生6名、2年生1名、3年生2名):家庭訪問者
子育て家庭(5家庭):家庭訪問受け入れ者
大学教員・子育て専門家(5名):事前学習講師、座談会ファシリテーター
地域の高校教員(1名):座談会参加者

実施時のポイント

- ▶ 学内の保育園や子育てラボ(※)とのネットワークを生かし、受け入れ家庭の募集及び学生の参加者募集を行った。家庭に入ることはリスクも伴うため、信頼関係に基づいたマッチングを行う必要があった。
- ▶ 子育てTALKと名付けた座談会では、家庭訪問の報告や振り返りを中心としつつ、大学生・家庭・大学教員・地域の方などの参加を呼びかけ、半屋外空間の環境と当日参加有・途中参加自由の雰囲気の下、多様な立場で子育てを語ることのできる機会として開催した。

※子育てラボ…学内教職員と企業のコラボコミュニティの一つ

実施時の課題

- ▶ 学生募集では学年ごとに昼休みに口頭で説明会実施。受け入れ家庭募集の際はお知らせに加え口頭でのやりとりを意識してもらった。
- ▶ 子育てTALKは、事前のチラシ作成・配布と大学ウェブサイト及びSNSでの発信を実施したが、夏休み中の開催だったため参加大学生の数は増えず、地域の園や高校への広報は間に合わなかった。
- ▶ 半屋外空間で行う出入り自由の雰囲気での子育てTALKは気軽さと楽しさを支えたが、荒天時の実施や延期時の対応には課題が残った。

効果検証の手法

参加者アンケート 対象者:参加養成校生、受け入れ家庭保護者

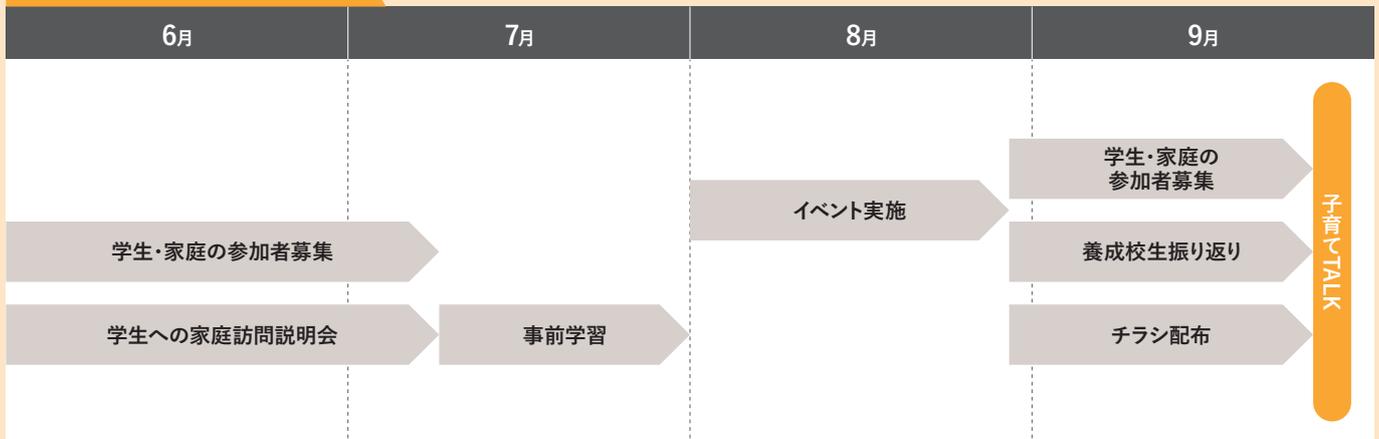
体制

子育てラボ、大学:企画・運営
コーディネーター:子育て家庭と養成校生のマッチング、座談会の企画・連絡
学内保育園:受け入れ家庭募集・事前学習・イベント運営協力

コスト

約1万円

スケジュール・Schedule



成果・Results

成果／見えてきた課題

- ▶ 参加養成校生アンケートにおいて「子育てはやはり大変そうだが、子供の成長を保護者が見守る幸せな空間だと感じた」「保護者の方から子育てや仕事、家族の話を知ることができてより具体的なイメージをもつことができた」との意見が見られた。
- ▶ 受け入れ家庭へのアンケートにおいて「ふだんより家庭や保育園だけでなく、たくさんの人との関わりの中で育てほしいと考えているため今回の機会は非常に貴重」「じっくり遊んでくれる養成校生との時間を楽しんでいる我が子を見て自宅でも子供が遊べる時間を確保したい」との意見が見られた。
- ▶ 座談会に近隣の高校教師も参加した。取組を高校生にも広げることを検討していく。

展開案

- ▶ 近隣の幼稚園や保育所とも連携し、受け入れ家庭を増やしていく。養成校生も幼児教育コースの学生以外への説明や募集の拡大が課題。
- ▶ 複数回の訪問希望(養成校生・家庭両方とも)が出ているので、経験を重ねるパターンも視野に入れ、経験を重ねる養成校生とチャレンジしたい養成校生の両方を視野に入れた計画をしていく。

成果物・Deliverables

- ▶ 広報用チラシ(参加希望者への配布と掲示)
- ▶ 東京学芸大学幼児教育コースウェブサイト記事
<https://yokyo.u-gakugei.ac.jp/>
パパ・ママ体験プロジェクト始動!事前学習して/
- ▶ 東京学芸大学幼児教育コースウェブサイト記事
<https://yokyo.u-gakugei.ac.jp/>
子育てtalk(パパ・ママ子育て体験報告座談会)に/
- ▶ パパ・ママ子育て体験参加者事後アンケート結果



養成校生が実習以外(パパ・ママ体験)で子供と触れ合う様子

小学生にも魅力を伝えたい！ 夏休み講座『かけっこ教室』

大阪青山大学

課題背景

令和5年度大学等を通じたキャリア形成支援による幼児教育の「職」の魅力向上・発信事業にて、中学生以下の子供たちにも幼児教育の魅力を伝える必要性が示唆された。地域貢献の一環である夏休みの小学生向けの公開講座を活用し、将来を考え始める以前の小学生にも「遊びを通した学び」としての幼児教育の発信を試みた。また、高等教育への進学にあたっては保護者の思いが反映される可能性があることも踏まえ、小学生の保護者にも同時に魅力を伝える必要性があると考えた。

取組概要

小学生とその保護者に向けて、実習参加前の幼稚園教諭等を目指す養成校生と教員が考えた、遊びを通した幼児教育の「職」の魅力を発信するイベントを実施した。

参加者・役割

幼 児(4名):参加者
小学生(13名):受講者
保護者(12名):付き添い

実施時のポイント

- ▶ イベント参加者募集のため、広報室と連携して事前にチラシの作成・配布を行った。
- ▶ 小学生とその保護者と同時に、実習前の養成校生も幼児教育の魅力を再確認できるようにした。
- ▶ 実習前の養成校生が「遊びを通した活動」を考えることで、実習に向けて前向きな気持ちを持てるようにした。
- ▶ ふだんより小学生に「遊びを通した学び」を伝える教員のもとで取り組むことで、イベントにおける活動の質を保つようにした。
- ▶ 例年外部向けイベントを開催している学内の地域連携部署・広報部署と連携することで、今までのイベントに参加している小学生にも情報が伝わるようにした。

実施時の課題

- ▶ 中学生・高校生は部活動などがあるため、夏休み期間中の開催であってもリーチが難しかった。

効果検証の手法

参加者アンケート 対象者:参加幼児者の保護者、養成校生

体制

大学:イベント企画運営

コスト

約5万円

スケジュール・Schedule



成果・Results


成果／見えてきた課題

- ▶ 保護者に対するアンケート結果から、幼児や小学生の保護者のイベント情報取得方法は「大学のウェブサイト」が最も多かった。毎年、夏休み期間中に外部向けイベントを実施・広報している部署と連携したことで、小学生・保護者への認知度が高まった。また、幼児教育者を目指す養成校生が子供と関わる姿は保護者にとって好評であった。
- ▶ 養成校生へのアンケート結果から、実習前に自分たちで遊びを考えて子供と関わることで、幼児教育に対するモチベーションが高まっていた。
- ▶ 養成校生が子供と一緒に体を動かしたり、活動したりする地域密着型のイベントは、幼児教育の魅力を伝える一つの方法として有用であることが示唆された。


展開案

- ▶ 養成課程に携わる教員がイベント運営を担当することで養成校生の主体的な参加を促し、より多くの養成校生が幼児と関わる機会を創出する。
- ▶ 付き添いとして来場した小学生の保護者に対して他のイベントや取組を紹介することで、幼児教育への流入や理解につなげる。

成果物・Deliverables

- ▶ アンケート結果



かけっこ教室にて、幼児とともに体を動かす養成校生



多層型交流会

小中高生、養成校生、
現職者(OB・OG)の二層以上が
会話・交流する機会を提供する取組

掲載事例

P26-27 **OB・OGと養成校生の交流会**

國學院大學

P28-29 **職場訪問**

東京学芸大学

P30-31 **集中講義での多層型交流**

大阪教育大学

OB・OGと養成校生の交流会

國學院大學

課題背景

令和5年度大学等を通じたキャリア形成支援による幼児教育の「職」の魅力向上・発信事業におけるOB・OGと実習前の養成校生の交流会が大変好評であり、より時間を取って話を聞きたかった、幼児教育・保育実習や施設実習前、就職前にも聞きたいというアンケート回答があったことから、本年度は回数を増やし、時期や対象とする学生を変えて実施することとした。

取組概要

幼稚園教諭等を招いて、幼稚園教育実習前の養成校生(2年生)と幼児教育・保育実習を終えた就職活動前の養成校生(3年生)との交流会を行った。

参加者・役割

養成校生(大学2・3年生、計約174名):参加者
現職者(OB・OG、計36名):参加者、登壇者

実施時のポイント

- ▶一度目は実習の経験のない2年生を対象とし、安心して実習に臨めるようにすることを目的とした。二度目は実習を経た3年生を対象に、実習経験を振り返り肯定的に捉えられるようにすること、また幼稚園教諭等への進路につなげることを目的とした。
- ▶3名のOB・OGと大学教員による対話形式の経験談トークショーを全体で行うことで質問をしやすい雰囲気づくりを行い、その後小グループで個別相談会・交流会を行った。
- ▶大学の教育課程を経験し、等身大の助言のできる年齢に近いOB・OGであるからこそ、養成校生が気楽に相談できた。
- ▶現職者も養成校生に幼児教育職の魅力を語ることで、自身の専門性に誇りや自信を持つことができた。

実施時の課題

- ▶多くの養成校生に参加してもらうための授業時間と現職幼稚園教諭等(OB・OG)の日程調整が課題であった。
- ▶交流会実施に係るコストが大きいと、資金調達の手立てが必要。

効果検証の手法

参加者アンケート:養成校生、現職者(OB・OG)

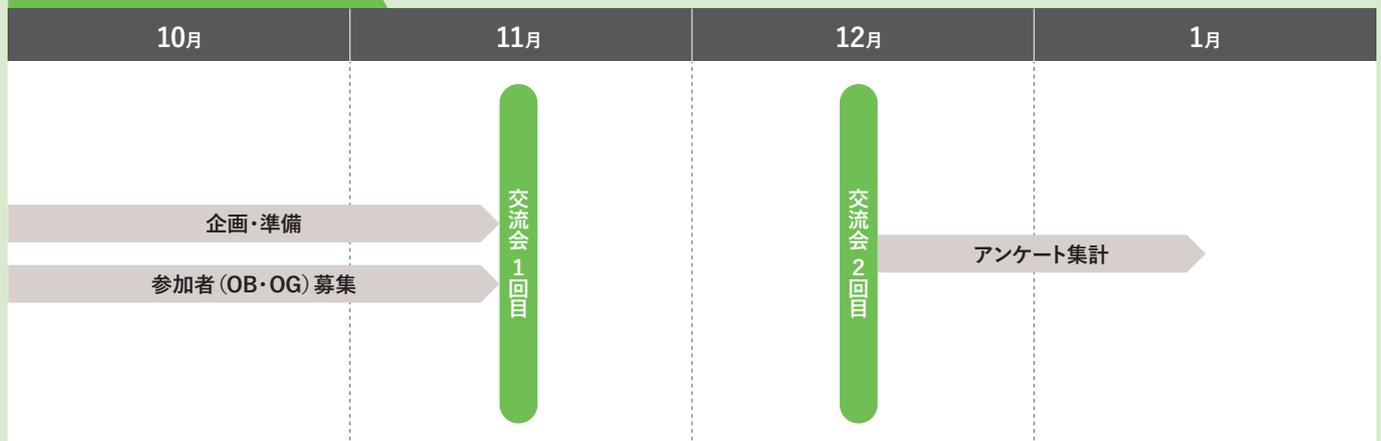
体制

大学:企画運営

コスト

約32万円

スケジュール・Schedule



成果・Results


成果／見えてきた課題

- ▶参加者アンケートでは、参加して「よかった」約98%、「まあよかった」約2%で満足度が非常に高かった。
- ▶また、幼稚園教諭等に就きたい思いが深まったかでは「深まった」が約68%、「少し深まった」が約35%、幼児教育職に対する興味や関心が深まったかでは「深まった」が約43%、「少し深まったが」約13%で、OB・OGとの交流会を実施することにより幼稚園教諭等の関心が深まっていることが示唆された。
- ▶実際の進路希望としては幼稚園教諭等を除く一般公務員希望者が14名、一般就職希望者が26名、まだ決まっていない者を含めたその他が10名おり、約3割の養成校生は関心の深まりと進路志望にギャップがある状態である。


展開案

- ▶実習の前後で2年生、3年生に多層型交流をそれぞれ実施することで、実習前の不安、実習後の幼児教育職への魅力の再確認、幼児教育・保育現場それぞれの就職支援につなげていく。
- ▶一人の学生が、多層型交流会を複数回経験できるよう、継続的に、拡大して実施することで効果の増大が見込める。

成果物・Deliverables

- ▶日本教育新聞(2025年1月20日号)
<http://www.kyoiku-press.co.jp/archives/4455>
- ▶遊育('24No22)
<http://www.u-iku.co.jp/>

職場訪問

東京学芸大学

課題背景

養成校生が求める、働き方のリアルや生の声を現場で体験することで、身近で信頼できるロールモデルを基に自身のキャリア形成に生かせるようにすることを目的とする。
現職者に対しても、大学教員や養成校生との交流を通して、自身のキャリアや職の魅力を確認できる機会の提供や幼児教育施設側の初期キャリア支援との連携を模索する。

取組概要

- ▶ 養成校生が幼稚園にて現場体験を行なった。
- ▶ 各園の現職者にキャリアや幼児教育職に関するインタビューや撮影を行い、その記録を基に学生の目線で職の魅力を伝える動画を作成・発信した。

参加者・役割

養成校生(計17名):現場見学、取材、コンテンツ制作
現職者(5園 計10名):現場案内、取材協力

実施時のポイント

- ▶ 職への多様な見方を担保するため、取材対象者には職歴の異なる2名を選出するよう受入園に依頼し、グループ面接の形式にて実施。
- ▶ 学生から現場ならではの質問が生じるよう、インタビューの前に十分な見学時間を設けた。
- ▶ 本学附属園の教員が同行することで、現職者(附属教員)ならではの他園への関心事・視点を学生が共有した。
- ▶ 若い年齢層により効果的に伝わる方法として、同世代の大学生が撮影・インタビュー・動画編集した幼児教育職のPR動画を作成。
- ▶ 学生自身も訪問後にインタビュー文字起こしや動画制作を行い、理解を深めた。

実施時の課題

- ▶ キャリアの多様性を養成校生が体験できるように、所在地や運営形態の異なる園・取材対象者を選定した。
- ▶ 動画やインタビューの発信における倫理面(説明・同意手続や発信内容の確認)を丁寧に進めた。
- ▶ インタビューの前に、見学を通して気になったことや、案内の話を聞いて疑問に思ったことなどを学生同士で出し合って、インタビュー内容や順序を相談させるなど、体験の学びを深めるための工夫が必要。

効果検証の手法

参加者アンケート:養成校生

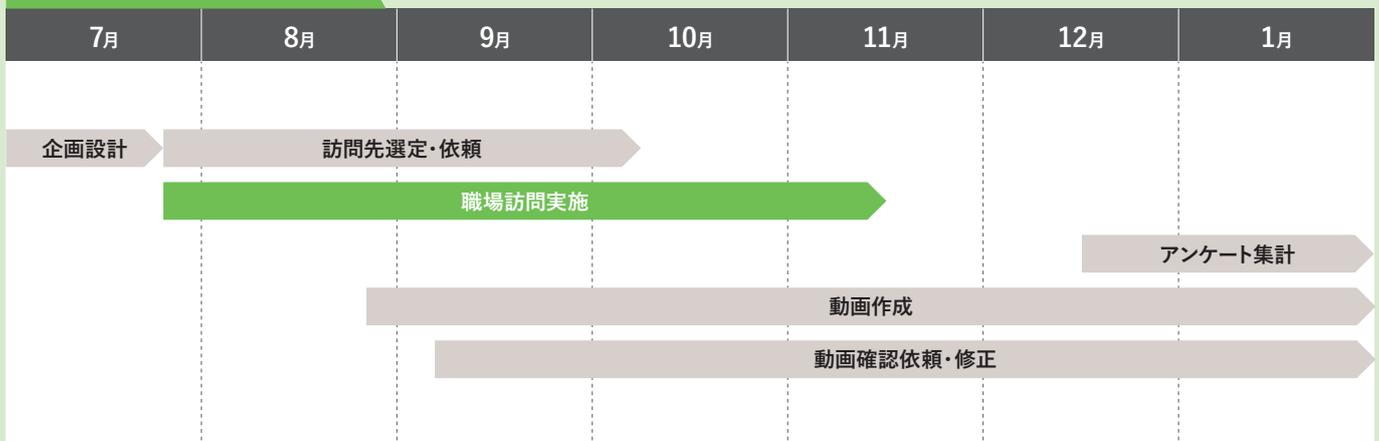
体制

大学(附属幼稚園含む):企画・運営・広報、現場訪問引率、インタビューおよびコンテンツ制作指導・監修
幼稚園・保育園:取材協力

コスト

約212万円

スケジュール・Schedule



成果・Results


成果／見えてきた課題

- ▶参加学生アンケートにおける「幼児教育職への期待が高まった」:「とてもそう思う」約33.3%、「まあそう思う」約66.7%
- ▶参加学生アンケートにおける「いろいろな実践があることが面白いと思った」:「とてもそう思う」、約88.9%「まあそう思う」約11.1%、「子供の魅力を感じた」:「とてもそう思う」約77.8%、「まあそう思う」約22.2%
→幼児教育職への理解や期待、子供の魅力の実感、いろいろな実践の面白さには一定の成果がみられた。
- ▶自由記述にて「現場でできる活動は思った以上に幅広いなと感じた」「複数名の方の話を聞くことで、キャリア形成等に関しても見識を深められた」「インタビューを通して自分のキャリアを見直してもよいのだと思った」との意見がみられた。
- ▶取組を継続的に実施するためには、コストの面を踏まえ、近隣で多様なキャリアをもつ現職者を探す必要がある


展開案

- ▶訪問する養成校生の学年を学部2～3年生に絞り込んで実施することで、自らのキャリア形成より効果的な体験が創出できると見込む。
- ▶現在の幼児教育の課題に対する考えや取組、やりがいなど、インタビューのテーマを事前に絞ることで、幼児教育職のネガティブなイメージを転換する機会となりうる。

成果物・Deliverables

- ▶大学幼児教育コースYoutubeチャンネル
(順次アップ中)
<https://www.youtube.com/@E6%9D%B1%E4%BA%AC%E5%AD%A6%E8%8A%B8%E5%A4%A7%E5%AD%A6%E5%B9%BC%E5%85%90-z5i/videos>
- ▶大学幼児教育コースウェブサイト記事
<https://yokyo.u-gakugei.ac.jp/category/news/project/>



現場体験を経て、現職幼稚園教諭等へインタビューをする養成校生

集中講義での多層型交流

大阪教育大学

課題背景

以前より、幼児教育専攻の集中講義には非常勤講師や実地指導講師として卒業生を招いている。しかし卒業間もない現職教員を招く枠組みがないため、在学生にとっては自分の就職直後の姿を想像しにくい。また、近隣の養成校生同士のつながりがうすいため、就職前からの養成校生・現職教諭との関係性構築をはかる。

取組概要

- ▶ 卒業間もない世代からもゲスト講師を招いた集中講義、同世代のホームカミングデーを実施。
- ▶ 幼児教育研究者のつながりを生かし、近隣や近隣の教員養成校にも案内。

参加者・役割

養成校生(1年生37名、3~4年生19名):受講者
 OB・OG現職者(計17名):ゲスト講師・実地指導講師
 そのほかの現職者(計14名 うち1名近隣養成校卒業生):ゲスト講師
 岐阜県の現職者(2名):ゲスト講師

実施時のポイント

- ▶ 土曜日の集中講義は大阪市内の主要駅に近いキャンパスにて実施し、参加しやすい条件を整えた。
- ▶ ゲスト講師だけではなくその同級生にも案内をし、多くの方の参加を促した。
- ▶ 事業実施者の非常勤出講先などにも案内をした。
- ▶ 教育大学協会幼児教育部会の近畿地区の先生方にも、集中講義の実施のたびに案内をした。
- ▶ 参加者同士の交流の時間を、授業中の討議時間や昼休みの食事会などのかたちで設けた。
- ▶ 集中講義当日のみの交流にならないよう、事後課題として、スプレッドシート上での意見交換・交流を行った。

実施時の課題

- ▶ 近隣養成校や近県養成校には、メールでの案内を複数回実施。近隣養成校からの異動教員にも同席していただき、懐かしい先生に会えることをその近隣養成校にアピールするなどした。
- ▶ しかし、実際には近隣養成校の卒業生の参加は数名程度、在学生の参加は0人にとどまり、大きな交流とすることができなかった。

効果検証の手法

参加者アンケート:養成校生、近隣・近県養成校からの参加実数

体制

大学:イベント企画・運営
 大阪市立幼稚園等:登壇者連携協力

コスト

約22万円

スケジュール・Schedule

6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
企画設計						
集中講義1回目	集中講義2回目			集中講義3回目	集中講義4回目	集中講義5回目

成果・Results



成果／見えてきた課題

- ▶ 3年生の先輩/OB・OG(現職者)のそれぞれとの対話で「将来、自分が就職する際の安心感が高まりましたか?」という設問に対し、「とても高まった」(対3年生:約21%、対OB・OG:約48%)、「高まった」(対3年生:約41%、対OB・OG:約36%)、「少し高まった」(対3年生:約36%、対OB・OG:約15%)。
- ▶ 年齢の近い卒業生との交流がより安心感につながる事が明らかになった。



展開案

- ▶ 集中講義では、今後も非常勤講師や実地指導講師に加え、年齢の近い卒業生を招き、交流の要素のある講話を実施したい。今回のように大勢のゲスト講師を集めることは難しいが、規模を調整すれば費用を抑えて実施が可能。
- ▶ 幼児教育養成校に進学する大阪府内の系列高校とも連携し、集中講義に招くことを検討。

成果物・Deliverables

- ▶ 集中講義の受講生と卒業生らとのスプレッドシート上の交流



集中講義にて養成校生と現役幼稚園教諭等が交流を行い、就職後も続く関係構築を図った



研修・講演会

現職者・離職者に対し、
改めて幼児教育職の魅力や
やりがいの再発見を促す取組

掲載事例

- P33-34 **役に立つ不安解消の研修(ダンス研修)**
札幌国際大学・札幌国際大学短期大学部
- P35-36 **地元自治体と連携した学び直しプログラム**
和洋女子大学
- P37-38 **OB・OGホームカミングデー・研修**
國學院大學
- P39-40 **プチ研修会と研修動画の作成**
東京学芸大学

役に立つ不安解消の研修(ダンス研修)

札幌国際大学・札幌国際大学短期大学部

課題背景

令和5年度大学等を通じたキャリア形成支援による幼児教育の「職」の魅力向上・発信事業で開催した現職者向けスキルアップ講座にて「リズムジャンプ」が好評であった。
近年、ダンスは年齢問わず人気が高いことから、中高生や子供の興味・関心が高く参加者が見込まれることと、幼稚園教諭等にとってもプロのダンス講師から学べる機会となると考えた。

取組概要

- ▶ 中高生、園児、現職者がプロのダンス講師からダンスレッスンを受ける。
- ▶ グループワークで振付の創作をすることで、体を楽しく動かすために子供に対してどのように指導するのか、幼児教育の中での身体表現としてのダンスの活用法などを学ぶ。

参加者・役割

中学生(3年生1名):受講者
高校生(2年生3名、3年生3名):受講者
現職者(13名):受講者
幼稚園児(年中児40名):受講者

実施時のポイント

- ▶ 幼児教育というカテゴリーを超えて様々な気づきがあると考え、プロのダンス講師(子供にダンスを指導している方)を招へいた。
- ▶ 中高生・幼稚園児・現職者で一つのグループとし、皆で振付を考えたり発表したりすることで、参加者同士が活発に交流できるよう工夫した。
- ▶ 現職者も参加しやすいよう、土曜日開催とした。

実施時の課題

- ▶ 札幌市内、近郊の中学校高校にチラシを配布したものの、中高生の参加は伸び悩んだ。現職者に対し、昨年はSNSでの配信のみであったが今年度は各園にチラシを送ったことで参加者が増加した。中高生の参加者を増やすことについては課題が残ったが、現職者については、チラシの配布が有効であることが分かった。

効果検証の手法

参加者アンケート:中高生、現職者

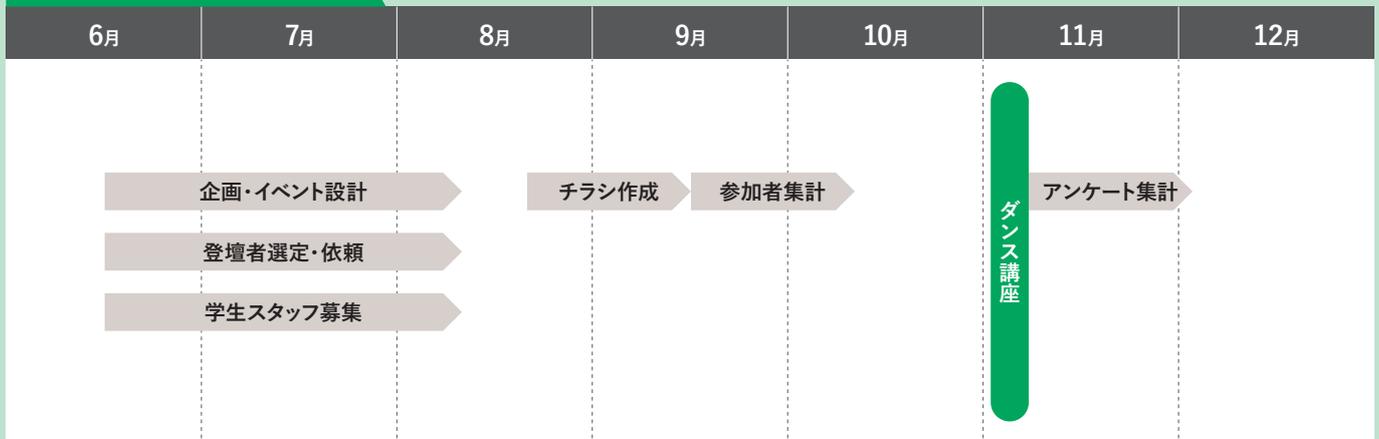
体制

大学:イベント企画、運営、チラシ作成・配布、運営補助の学生の管理
養成校生:運営補助
近隣中高:広報協力(対中高生)
近隣の幼児教育施設:広報協力(対幼稚園教諭等)
札幌市:広報協力(ウェブサイト上でのイベント告知)

コスト

約55万円

スケジュール・Schedule



成果・Results

成果／見えてきた課題

- ▶参加者アンケートにて「満足」と「やや満足」を合わせて約88%であった。
→良かった点として「プロから学ぶおもしろさを感じた」
「体の動かし方について、子供への説明のしかたがためになった」「本格的だった」「遊戯ではなくダンスを知ることができた」というような感想が多く見られた。
- ▶多くの中高生の参加を促すためには、幼稚園教諭等を志望している中高生の裾野を広げることが課題である。他のイベントとの合併ではないようなチラシの作成に工夫が必要である。

展開案

- ▶ダンスに限らず、幼児教育に生かせるスキルをその道のプロから学ぶ機会は、現職者のスキルアップにつながると考えられる。
- ▶特にアクティブラーニング形式は、受講者が実際に身体を動かして真剣に取り組んでいたため、多種の「プロシリーズ」として開催していくと参加者の増加が見込める。

成果物・Deliverables

- ▶広報用チラシ：
近隣中学、高校、こども園、幼稚園に配布
- ▶さぼ笑み(札幌市保育人材支援センター)掲載



中高生、園児、現職者がグループとなり、プロのダンス講師からレッスンを受けている様子

地元公共団体と連携した学び直しプログラム

和洋女子大学

課題背景

令和6年度私立大学等改革総合支援事業の一部として、大学コンソーシアム市川(※)産官学連携プラットフォームがキャリア形成プログラムとして開催した。

※大学コンソーシアム市川は、千葉県市川市に所在する五つの高等教育機関が、教育資源や機能等の活用を図りながら幅広い分野で相互に連携協力し、教育研究の質的向上を図り、地域社会の発展に資することを目的として設立された。

取組概要

大学の教員による幼稚園教諭等を対象とした専門的成長のためのプログラム。オンラインにて全3回開催し、各回で講義と質疑応答を行った。

参加者・役割

千葉県内の幼稚園教諭等の資格保持者(計51名):受講者
教員(養成校3大学から各1名):講師

実施時のポイント

- ▶ 平日の勤務時間内でのオンライン開催とした。勤務時間中に研修として参加を促進した。
- ▶ 市川市内の大学教員と行政が連携して、現場に資するプログラムを開催した。

実施時の課題

- ▶ 参加者数の拡大: 広報方法を見直し、より多くの幼稚園教諭等が参加できる環境を整備する必要がある。
- ▶ シリーズ開催: 全3回で一つのプログラムと想定していたが、全ての回には参加できない受講者もいた。

効果検証の手法

参加者アンケート: 受講者

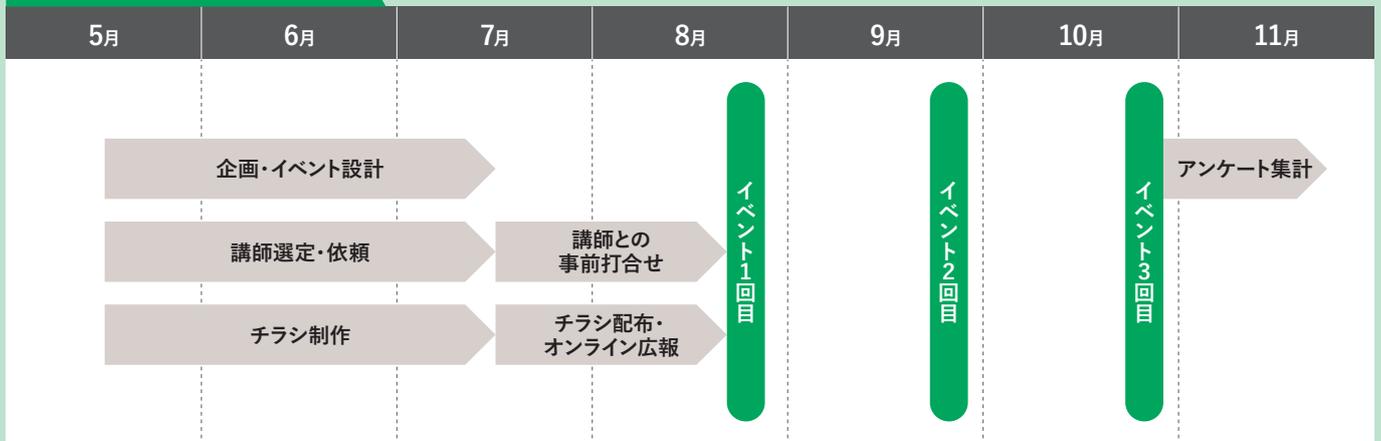
体制

大学: イベント企画・運営
大学コンソーシアム市川キャリア支援部会: 事務局
市川市、幼稚園協会、近隣幼稚園・保育園等: 広報(チラシ)協力

コスト

詳細非公表(講師の謝礼金等)

スケジュール・Schedule



成果・Results

成果／見えてきた課題

- ▶ アンケート結果における「大変満足」「満足」が約80%。
→「事例に基づいた内容で、実務で生かしやすいプログラムであった」「気になる子供への対応を見直すきっかけになった」「子供への理解を深めることの大切さを再認識した」などポジティブなコメントが多かった。
- ▶ 質疑の時間には、幼児教育現場での具体的な事例についての質問が多く寄せられ、関心の高さがうかがわれた。講座に参加した現役の幼稚園教諭等を通じ、園と大学(養成校生)のつながりの一翼を担うことができた。
- ▶ オンライン開催は参加しやすいメリットもあるが、質疑では、それぞれの現場での具体的な悩みが語られたため、双方向性を担保する必要がある。

展開案

- ▶ アンケート結果を踏まえ、時期や方法についても、次年度も同様の形式で実施予定。
- ▶ 継続開催により講座が認知され、「学びなおし」の習慣化につながる事が期待される。

成果物・Deliverables

- ▶ 広報用チラシ(オンラインにて周知。市川市をはじめ全千葉県幼稚園連合会等が協力)
- ▶ オンライン記事
https://www.wayo.ac.jp/career/news/2024/career_0719

学び直しプログラムの
広報用チラシ



OB・OGホームカミングデー・研修

國學院大學

課題背景

令和3年度には新卒だけを対象とするフォローアップ研修、令和5年には現職者を対象とする年1回の研修を行ってきたが、より一層の継続的なキャリアアップのための研修が必要であると考えた。また、日頃からの幼児教育の悩みを相談できる精神的サポートとなるような養成校教員と現職者との少人数で気楽に話ができる取組を行っていくことが求められている。

取組概要

1回目は主に幼稚園教諭と保育教諭、2回目は保育士として勤務しているOB・OGを対象に、幼児教育についての研修および少人数グループでの茶話会を実施。

参加者・役割

養成校教員:運営、講師
現職者(計36名):参加者

実施時のポイント

- ▶ 幼児教育と乳児保育に関する研修をOB・OGの職種に応じて2回設定することで、それぞれのキャリアに応じた研修を実施するようにした。
- ▶ 研修後の茶話会では、3~4人のOB・OGに対して教員が1~2人入った小グループでの茶話会を実施し、気楽に話しやすい雰囲気の中で「幼稚園教諭等で大変なこと」「幼稚園教諭等でよかったこと」「幼稚園教諭等を続けるための条件」などについてOB・OGの経験や思いを意見交換し、今後の人材確保につながる有効な意見を得られるようにした。
- ▶ 在学時にゼミ担当や実習、就職を担当した教員との交流ができるように図り、安心して悩みが相談できる場を設定した。

実施時の課題

- ▶ 11月、12月は幼児教育・保育現場での行事が多い時期でもあり、開催日の土曜日に参加できないOB・OGが多くなってしまった。開催時期についての検討が必要である。
- ▶ 今回はプロジェクトの枠組みがあったことと時間的な制約があったが、茶話会ではOB・OGのキャリア以外の話にも広がることもあり、会話のテーマに焦点化して茶話会を進行する工夫が必要である。
- ▶ 研修講師料や茶話会実施に係るコストが大きいと、資金調達の手立てが必要である。

効果検証の手法

参加者アンケート:現職者(OB・OG)

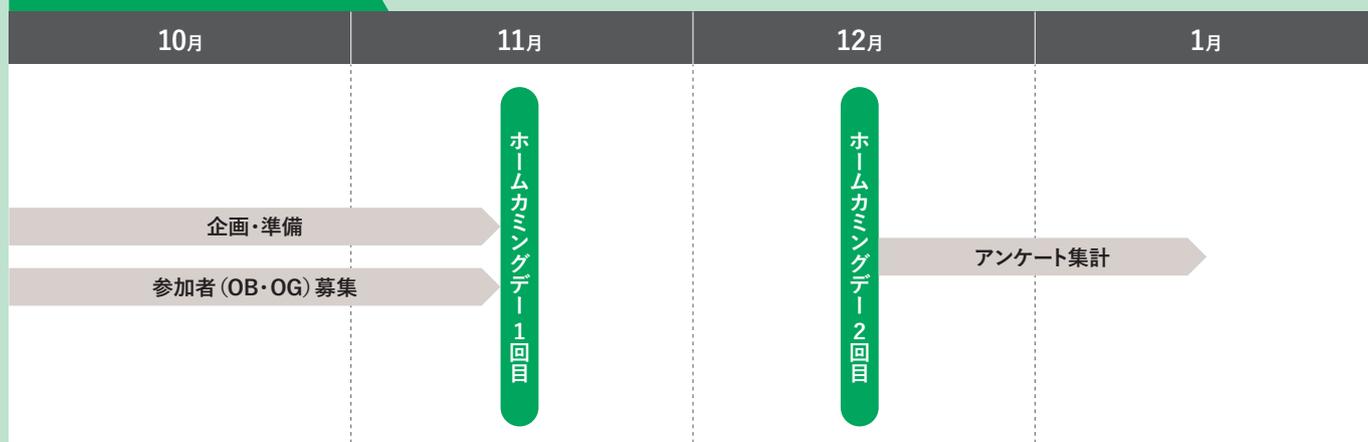
体制

大学:企画・運営

コスト

約14万円

スケジュール・Schedule



成果・Results



成果／見えてきた課題

- ▶参加者アンケートにおける研修への参加について「よかった」約94%、「まあよかった」約6%で非常に満足度が高かった。
- ▶参加者アンケートにおける茶話会への参加について「よかった」約97%、「まあよかった」約3%で非常に満足度が高かった。
- ▶研修では就職後に改めて話を聞くことで自身の経験を振り返って考えが深まったり、新たな視点がももらえたりしたという意見が多くあった。
- ▶茶話会では、久しぶりに教員や同級生等と話ができたことで安心したり、他の職場の幼稚園教諭等の話が聞けることで、共感したり、新たな可能性を見いだしたりすることができた。



展開案

- ▶多様な幼稚園教諭等研修を複数回実施することで、多様なニーズを持つ幼稚園教諭等のキャリアアップにつなげる。
- ▶茶話会については今年度のような職種に応じた少人数での形態で、気楽に話ができるような場を複数回実施していく。

成果物・Deliverables

- ▶大學学報:國學院大學学報令和7年1月20日(月) No.741

プチ研修会と研修動画の作成

東京学芸大学

課題背景

卒業生の多くは子供の成長に関わる仕事に期待を持って就職するが、現場での日々の忙しさや、うまくいかなさを感じている声も聞く。現場では丁寧に話を聞いたり教えたりするには限界もある。現職者が楽しく働き続ける仕組みづくりの一つとして、日々の悩みを話したり学んだりできる研修の機会が必要である。

取組概要

現職者が共に学び、情報や悩みを共有するプチ研修会を実施し、受講者のニーズをもとにした研修動画を作成した。

参加者・役割

幼稚園・認定こども園に勤める現職者、大学院生(計22名):参加者
 附属幼稚園教諭(各回3名):講演・アドバイザー

実施時のポイント

- ▶ 養成教育では含み切れない三つの項目(「ごっこ遊び」「教育実習」「保護者会」)に焦点を当て、テーマとして設定。研修会の冒頭で附属幼稚園教員が各テーマについて10分程度、ポイントを伝えるプレゼンテーションを行った。
- ▶ 参加者は深めたいテーマを選択しグループ討議に参加する。自分の悩みを話したり互いの話を聞いたりした。各グループには教員がアドバイザーとして同席し、一緒に考える時間を設けた。

実施時の課題

- ▶ イベントの参加者募集においては、同窓生のネットワークと大学ウェブサイトでの発信を活用。同窓生以外の参加者募集の方策も検討していく。
- ▶ 現職者を対象としているため、参加者も開催側も無理なく参加できるようなスケジュール調整が必要。

効果検証の手法

参加者アンケート:現職者、大学院生

体制

大学:研修会運営、広報、記録
 幼稚園教諭:告知チラシ作成、会場設定、プレゼン、アドバイザー

コスト

約2万円

スケジュール・Schedule



成果・Results

成果／見えてきた課題

- ▶参加者アンケートでは22人中21人が「満足」と回答した。
→自由記述では「普段の研修では話題にならないテーマを聞けて良かった」「リアルな悩みを聞けて、自分だけじゃないと思った」「自分を肯定してもらえた気分」など参加したことで気持ちが前向きになる様子が見えた。
- ▶特に教育実習について「自身が実習で学んで教員を目指した」「実習生の指導を手探りでやっている」「自分の経験しかなく指導が難しい」という声があり、実習指導についての動画を作成することとした。

展開案

- ▶プチ研修会の年間スケジュールを作成し、より早めに参加者を募る。
- ▶附属幼稚園も役割を分担して、負担のないようにする。
- ▶アンケートで得られた今後のテーマ(身体表現遊び、個人面談の進め方、遠足の行き方選び、後輩養成など)の希望に添うような内容を工夫する。

成果物・Deliverables

- ▶大学幼児教育コースウェブサイト記事
<https://yokyo.u-gakugei.ac.jp/category/news/project/>
- ▶パンフレットへの掲載
- ▶研修動画



参加した現職者は、テーマごとに討議・プレゼンテーションを実施した



就職支援

マッチングや相談会等、
自分に合った
就職先を探すための取組

掲載事例

P42-43 **自治体と連携した
就職マッチング・プラットフォーム形成の試み**
和洋女子大学

自治体と連携した就職マッチング・プラットフォーム形成の試み

和洋女子大学

課題背景

地元での就職を希望する養成校生が多いが、実習先以外の就職先の情報を得る機会がウェブサイトや大学就職センターの資料等に限定されている。その一方で、幼稚園等も人材確保に苦慮している。

取組概要

三つの養成校の学生及び幼稚園教諭等の有資格者と市川市内30団体を集め、養成校生・有資格者が参加団体を回る形式で説明会を実施した。既卒生や栄養士等も参加を受け付けた。

参加者・役割

養成校生・OB・OG(計81名):参加者
 私立幼稚園・認定こども園・私立保育園・小規模保育所等(30団体):参加団体

実施時のポイント

- ▶ 合同説明会に参加する養成校生の減少を鑑みて、各大学担当者にて掲示物に加え、オンラインでの案内を実施した。
- ▶ 効率的に準備して説明を聞けるよう、参加者に対して事前に説明会参加園の一覧を案内した。
- ▶ 参加者の不安払拭のため、各参加大学より数名の教職員が同行した。

実施時の課題

- ▶ SNS世代である養成校生は自分に合った情報が自動的に提示される環境にある中、「多くの園がある中でどの園の説明を聞いたらいかが分らず就職相談会に参加しにくい」という声もあり、参加者のニーズの変化への対応が求められた。
- ▶ 多様な園を知る機会として参加を義務づけたり低学年の参加を認めたりする養成校もあったが、参加団体から「明らかに本人の意志で参加していない場合が見受けられた」という指摘があった。園を知る機会を保障しつつ、どのような参加方法が適切かを検討する必要がある。

効果検証の手法

参加者アンケート:養成校生、参加園

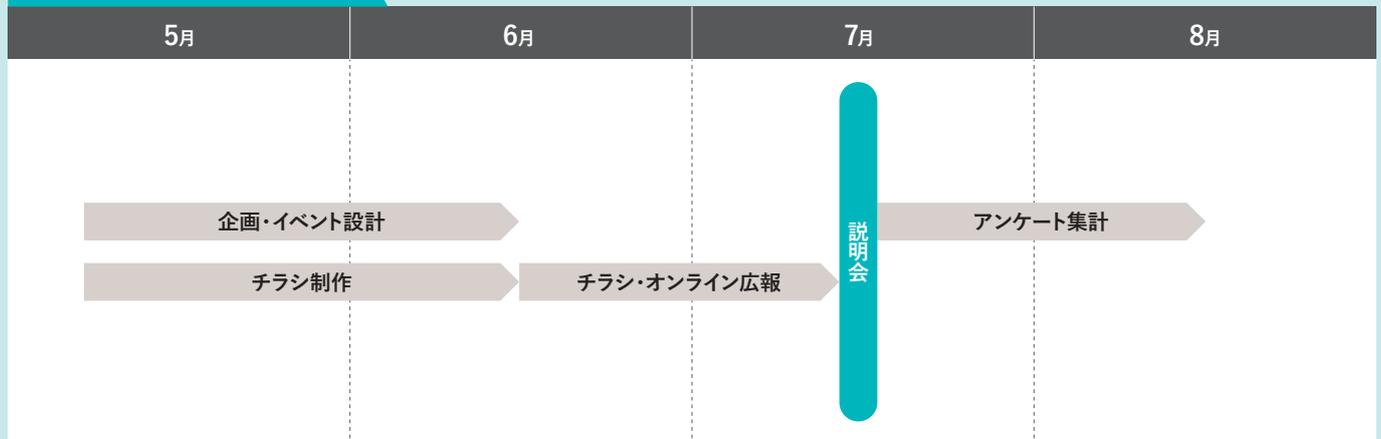
体制

大学、市川市大学コンソーシアム市川産官学連携プラットフォーム キャリア支援部会: イベント企画・広報・運営
 大学職員: 会場準備、当日運営、相談対応
 市川市幼稚園・保育園: 説明会出席

コスト

詳細非公表(広報用チラシ、参加園一覧表作成費用)

スケジュール・Schedule



成果・Results


成果／見えてきた課題

- ▶ 養成校生のアンケート回答にて「様々な園の情報、幼児教育・保育で大事にしていることを知ることができた。自分が幼児教育・保育で何を大切にしたいのか、どの施設が自分に合っているのかを見極めていきたいと思う」「気になっていた幼児教育施設の話を知ることができた」との声が見られた。
- ▶ 参加団体のアンケート回答にて「しっかりとメモをとり、積極的に話をきいてくれ、事業者としてもうれしかった」との声があった。


展開案

- ▶ 上記記載のアンケート結果を踏まえ、次年度も同様の体制で実施予定。養成校生と幼稚園・こども園・保育園のよりよい接点とできるよう実施していきたい。
- ▶ 課題を踏まえ、意図的に参加団体を絞った小規模合同説明会等も検討。ただし、近隣自治体を含めて多くの説明会があるために養成校生が分散し、参加率の減少につながる懸念もあり、実施規模や回数には検討が必要。

成果物・Deliverables

- ▶ 広報用チラシ
- ▶ オンライン記事
https://www.wayo.ac.jp/career/news/2024/career_0819



養成校生や有資格者(OB・OG)が、参加園のブースを回って説明を受けた



周知広報

パンフレット、チラシ、
ウェブサイト等を作成し、
それらを用いて「職」の魅力を発信する取組

掲載事例

- P45-46 **離職者向けリーフレット制作・他業種向けチラシ制作**
札幌国際大学・札幌国際大学短期大学部
- P47-48 **ICTを活用する現職教諭への取材**
大阪キリスト教短期大学

離職者向けリーフレット制作・ 他業種向けチラシ制作

札幌国際大学・札幌国際大学短期大学部

課題背景

幼稚園教諭等不足の解消のためには、離職者（潜在幼稚園教諭等）の現場復帰の支援と他業種から幼稚園教諭等への人材流入を促すことが重要である。
離職者に関してはブランクが長くなればなるほど復帰への不安が大きくなることが推察され、異業種からの流入という点では、幼児教育施設で働く無資格者の資格・免許の取得推進が求められる。

取組概要

離職者向けのリーフレットでは、養成校が作成するという点で「今の幼児教育・保育のポイント」「離職の理由や幼稚園教諭等に戻った理由など」のアンケート結果を掲載した。無資格者向けには、社会人が学びやすい長期履修の特色を掲載したリーフレットとした。

参加者・役割

養成校教員：リーフレット作成
OB・OG：アンケート調査対象者

実施時のポイント

- ▶ 離職者向けリーフレットにおいて、世代別（30代/40代/50代）の卒業生へアンケートを実施し、「離職の理由」「離職している間に何をしていたか」「幼稚園教諭等に復帰した理由」「幼児教育の魅力」など、集まった体験談を掲載することで興味・関心を促進した。
- ▶ 他業種（無資格者）向けチラシでは、幼児教育施設で働いていることから幼稚園教諭等には一定の関心があるという前提の下、資格取得のために公的な給付金が利用できることや、長期履修制度を活用することで働きながら資格取得が目指せることを記載した。

実施時の課題

- ▶ 離職者向けリーフレットには、さぼ笑み（札幌市保育人材支援センター）や札幌市私立幼稚園連合会の二次元バーコードを掲載し、求人情報に結びつくよう工夫した。
- ▶ 他業種向けチラシは、資格取得のための通学を見据えて12月に近隣の実習園へ配布した。

効果検証の手法

実際の受験者数
さぼ笑み（札幌市保育人材支援センター）や札幌市私立幼稚園連合会に掲載している、求人情報とのマッチング実績

体制

大学：リーフレット・チラシの作成、配布
札幌市、札幌市幼稚園連合会：リーフレット・チラシの配布協力

コスト

約1万円

スケジュール・Schedule



成果・Results

成果／見えてきた課題

- ▶ 他業種向けチラシを実習園に配布したところ、問合せがあった。実際に養成校大学院受験に結びつくことが期待される。
- ▶ 制作したリーフレットやチラシを実際に離職者・他業種の方へ届けるためには、広報面での工夫が必要である。今年度は、既に幼稚園教諭等に関心がある「他業種(=幼児教育施設で働いている無資格者)」をターゲットに据えたが、より多くの人に関心を持ってもらうためには、他の方法も取り入れていく必要がある。

展開案

- ▶ 離職者向けリーフレットを、同窓会等を通じて卒業生へ配布する。
- ▶ 札幌市や札幌市私立幼稚園連合会との連携や、SNS等を通じた広報活動は引き続き展開する。

成果物・Deliverables

- ▶ 離職者対象リーフレット
- ▶ 無資格者向けチラシ



無資格者向けチラシ



離職者向けリーフレット表紙

ICTを活用する現職教諭への取材

大阪キリスト教短期大学

課題背景

教育テック(=ICT)を活用した幼稚園教諭等のより一層の魅力向上により、新しい入学者の掘り起こしに成功した。
一方で、このような幼児教育×ICTの取組は養成校単独での幼児教育の魅力向上が困難であり、大学間での連携が重要である。

取組概要

ICTを活用した幼児教育の魅力向上を目的に、現職教諭への取材を実施し、ICTを活用した教育の実践例やリアルな声を養成校生や高校生等に対してインターネットで発信した。

参加者・役割

付属幼稚園:取材協力
連携養成校:取材協力
認定こども園:取材協力

実施時のポイント

- ▶取材対象として、スキル(現職教諭へのICTを積極的に活用している幼稚園教諭)、働き方(出産後復帰した幼稚園教諭や男性教諭等)が多様な幼稚園教諭を選定し、キャリアや働きがいなどを取材し、ロールモデルとして養成校生や高校生等に対して発信した。
- ▶複数の養成校が共同で実施することで、多様なキャリアを有する幼稚園教諭に取材打診できることに加え、本仕組みを維持する際の一枚当たりの負担の低減効果が期待できる。

実施時の課題

- ▶ICT活用の進んだ教諭の選定が重要であり、特に幼児の発達に適した活用事例を持つ現職教諭等への協力依頼が必要。
- ▶日々の業務や保護者とのつながりでICTを活用するだけでなく、子供たちに「伝える」「共有する」存在としてのICT活用が進んでおり、ICTが子供のためになることを理解していただく。

効果検証の手法

インタビュー
ウェブ記事閲覧数

体制

大学:企画運営、記事執筆、公開
養成校生:取材協力

コスト

記事制作費用:約30万円

スケジュール・Schedule

7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月
企画	他大学との 打ち合わせ	取材対象選定・取材・記事作成				ウェブ記事公開	

成果・Results



成果／見えてきた課題

▶ICT活用を得意とする幼稚園教諭等は全国にもまだ少ないため、取材対象者の選定が困難である。



展開案

▶今後はICT活用の利点だけでなく、課題や制約(機器導入コスト、幼稚園教諭等のICTリテラシーの差など)についてもリアルな声を伝えていく必要がある。

成果物・Deliverables

▶ウェブサイト
<https://www.hoikuict.com/>



ICT活用をしている幼稚園へのインタビュー記事



ICT・デジタル活用

ウェブサイト、SNS以外の
デジタルプラットフォーム等を活用し、
「職」の魅力を発信する取組

掲載事例

- P50-51 **教育・保育体験プログラム**
(幼児教育・保育ICT講座、わくわくさんの工作体験)
札幌国際大学・札幌国際大学短期大学部
- P52-53 **ICTを活用した「新しい幼稚園教諭」の魅力の
オープンキャンパスでの発信**
大阪キリスト教短期大学
- P54-55 **次世代を育てるeラーニングの開発・展開**
大阪キリスト教短期大学
- P56-57 **「なるきょう めたばーす! 森のようちえん」を
中心とした発信プログラム制作**
鳴門教育大学

教育・保育体験プログラム (幼児教育・保育ICT講座、わくわくさんの工作体験)

札幌国際大学・札幌国際大学短期大学部

課題背景

中高生には主に子供と関わる楽しさを体験すること、幼稚園教諭等を目指す学生や現職者、離職者には幼児教育・保育現場にICTを導入することで、幼児教育・保育をより楽しくする工夫や業務の軽減につながるということを体験してもらうことを目的として開催した。

特に幼児教育・保育現場にICTを活用し、もっと幼児教育・保育を面白くする方法を学ぶことで、幼児の体験を豊かにすることにつながると考えた。

取組概要

▶〈幼児教育・保育ICT講座〉講師として教育におけるICT活用を研究している研究者を招き、幼児教育を豊かにする活用法についてワークショップを開催した。

▶〈わくわくさんの工作体験〉わくわくさんを講師に招き、中高生と子供と一緒に工作活動をした。現職者などは見学および交流を行った。

参加者・役割

〈幼児教育・保育ICT講座〉

高校生(3名)、保護者(1名)、現職者(13名):受講者

〈わくわくさんの工作体験〉

中高生(中学生3名、高校生29名)、現職者(54名):受講者、養成校生(6名):受講者

実施時のポイント

〈幼児教育・保育ICT講座〉

- ▶ iPadを貸与し、実際に参加者一人一人が体験できるようにした。
- ▶ 子供の体験としてICTを活用することで体験が豊かになるという視点と、幼稚園教諭等の業務としてICTを活用することで業務の軽減の2点の視点からのワークショップとした。
- ▶ 幼稚園教諭等の業務の負担軽減では、生成AIを使用することで、発表会の曲作りなどが簡単にできることが紹介された。

〈わくわくさんの工作体験〉

- ▶ 中高生の体験と幼稚園教諭等が活動を見学し、わくわくさんとの質疑応答でどちらにとっても有意義な体験となるように企画した。

実施時の課題

- ▶ 中高生の多くの参加者を募集するためには、幼稚園教諭等を志望している中高生の裾野を広げることが課題である。札幌市内、近郊の中学校、高校にチラシを配布したが中高生の参加は伸びなかった。
- ▶ 現職者は、昨年はSNSでの発信だけだったものを今年度は各園にチラシを送ったことで参加者が多かった。中高生の参加者を増やすことについては課題が残ったが、現職者については、チラシの配布が有効である。

効果検証の手法

参加者アンケート:中高生、現職者

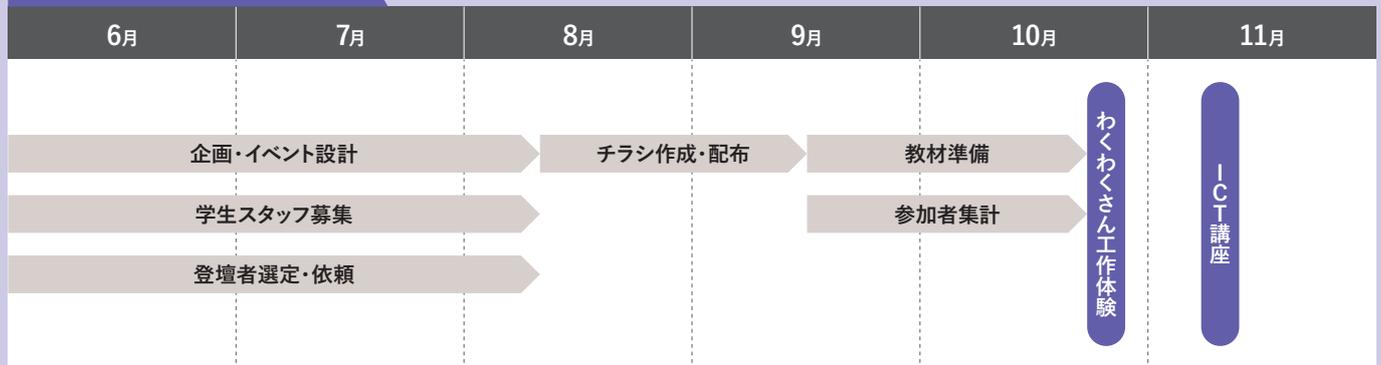
体制

大学: イベント企画、運営、チラシ作成・配布、運営補助の学生の管理
 養成校生: 運営補助
 近隣中高: 中高生へのチラシの配布
 近隣の幼児教育施設: 幼稚園教諭等へのチラシの配布
 札幌市: 幼児教育職人材確保のホームページでのイベントの告知

コスト

幼児教育・保育ICT講座: 約2万、わくわくさんの工作体験: 約70万円

スケジュール・Schedule



成果・Results



成果／見えてきた課題

〈幼児教育・保育ICT講座〉

- ▶ アンケートにおける満足度では「満足」が約76%、「ほぼ満足」が約24%であった。
- ▶ 良かった点:「幼児教育・保育現場に活用できる」「自分では気づけなかったくさんのアイデアを知ることができたから」
- ▶ 1時間半は時間が足りず、タイムスケジュールの再設計が必要。

〈わくわくさんの工作体験〉

- ▶ 中高生の参加者全員が、体験後に幼児教育・保育に対する興味・関心が増した。
- ▶ 幼稚園教諭等の参加の仕方として見学という形であったが、幼稚園教諭等も工作に参加したいという希望が多かったので、今後の課題として残った。



展開案

〈幼児教育・保育ICT講座〉

- ▶ 参加者アンケートにおける「今後もこのようなイベントに参加したい」約90%
→ ICTの活用のような新しい分野のイベントの参加者が見込まれる。

〈わくわくさんの工作体験〉

- ▶ 参加者アンケートにおける「今後もこのようなイベントに参加したい」約97%
→ 中高生は子供と関わって楽しい、現職者は幼児教育・保育のネタになることが多くあるということで、今後も多くの参加者が見込まれる。

成果物・Deliverables

- ▶ 広報用チラシ:
近隣中学、高校、こども園、幼稚園に配布。
さぼ笑み(札幌市保育人材支援センター)
ウェブサイト掲載
- ▶ プレスリリース記事
<https://kyodonewsprwire.jp/press/release/preview/202410299010/2997U7v36zi7>



幼児教育・保育ICT講座では、幼児の体験強化・業務負担改善の方法を講義した



わくわくさんの工作体験にて、幼児も工作体験を楽しんだ

ICTを活用した「新しい幼稚園教諭」の 魅力のオープンキャンパスでの発信

大阪キリスト教短期大学

課題 背景

令和5年度大学等を通じたキャリア形成支援による幼児教育の「職」の魅力向上・発信事業にて、オープンキャンパスにおけるICTを活用した幼児教育の魅力の訴求のためには、説明員となる養成校教員の知識と理解が必要になることが明らかになった。
また、幼児教育×ICTの取組は養成校単独で産学連携機能を持つことが難しいため大学間での連携が重要である。

取組 概要

オープンキャンパスを活用しICTを活用した「新しい幼稚園教諭」の姿を体験できるプログラムをパッケージ化して提供し、小中高生の関心を喚起した。

参加者・役割

小中高生:参加者
他養成校生:参加者

実施時のポイント

- ▶ 大学付属園でICTツールを活用していることが説得力を担保した上で、ICTを活用した幼児教育を提示することで、今までであれば幼児教育を選択しなかった可能性のある児童・学生を取り込む。
- ▶ 大阪キリスト教短期大学のみならず、他養成校の教職員とも意見交換しながらプログラムを開発することでパッケージ化し、他養成校への展開方法を検討した。
- ▶ コンテンツ開発に際し、まずは連携内関係者自身がICTについて十分に理解するため、事前に内部研修を実施（→本パンフレットP54「次世代を育てるeラーニングの開発・展開」と連携した取組）。

実施時の課題

- ▶ ICTを活用した幼児教育が具体的にどのようなものか、小中高生に実感してもらうための体験設計が重要。ICTツールの導入・活用が進んでいない他養成校生にも分かりやすく伝えるための説明やデモが必要。
- ▶ 大学付属園での実践を前提とした発信が求められるが、大学ごとのICT環境の違いを考慮しながら、参加者がイメージしやすい形で提供することを考慮する必要がある。

効果検証の手法

アンケート調査:参加中高生、他養成校

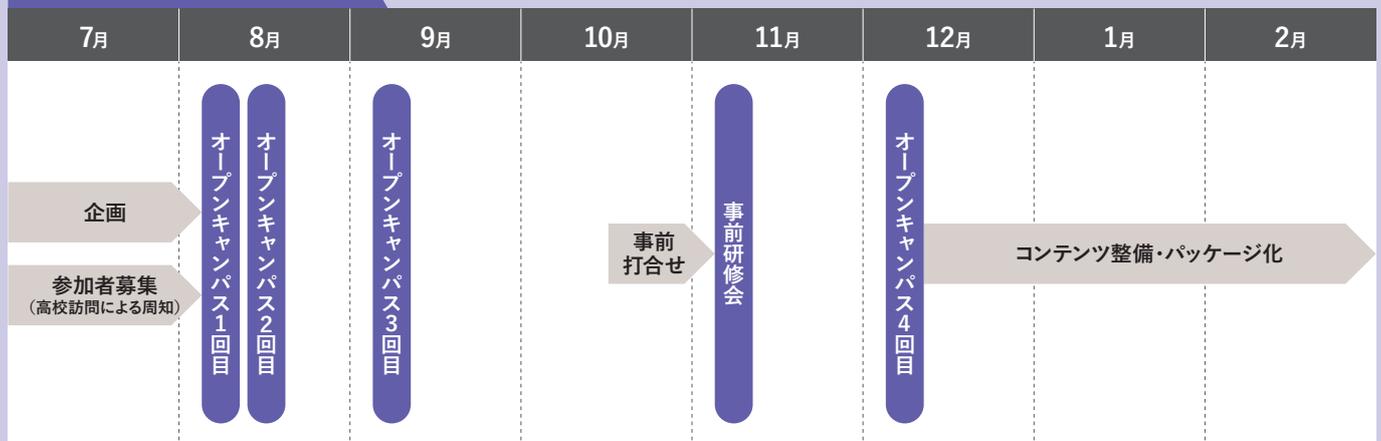
体制

大学:企画・運営
養成校生:運営補助
付属幼稚園:コンテンツ作成のための情報提供
他養成校生:コンテンツの検証、意見交換

コスト

コンテンツ開発費:約200万円

スケジュール・Schedule



成果・Results



成果／見えてきた課題

- ▶ オープンキャンパスでの説明に向け、関係者に対して先んじて行った研修により、オープンキャンパス当日の説明の質を上げ参加者に訴求するとともに、養成校生・養成校教員のスキルアップにつながった。
- ▶ オープンキャンパス当日、他養成校教員の都合が合わず直接意見を聞くことができなかったが、オープンキャンパスのパッケージ化や事前研修(→本パンフレットP54「次世代を育てるeラーニングの開発・展開」)での連携に関しては前向きな回答があった。



展開案

- ▶ 他養成校への展開も含め、養成校入学のきっかけとなりうるオープンキャンパスのパッケージを広めていく。入学後のフォローについては、プラットフォーム化の利点を生かし、他の養成校のノウハウを参考にしていく。

成果物・Deliverables



オープンキャンパスでの説明員に対し、事前にレクチャーを実施した

次世代を育てるeラーニングの開発・展開

大阪キリスト教短期大学

課題背景

養成校生・現職教諭に対する資質向上への取組を、入学者数が減少傾向にある養成校単独で実施することは資金面・人的リソース面から難しい場合がある。複数の養成校が共同で展開できるeラーニングコンテンツ・手法を検討し、制作、展開する方法を模索する必要がある。

取組概要

令和5年度大学等を通じたキャリア形成支援による幼児教育の「職」の魅力向上・発信事業にて実績を上げることができた「ICT活用」をテーマに定め、次世代を育てるためのeラーニングとして幼児教育の現場での生成AI活用を開発し、養成校生の資質・能力向上を行うほか、幼稚園教諭等に対する研修を実施。

参加者・役割

現職者(約100名):受講者

実施時のポイント

- ▶生成AIに関する知識を提供するのではなく、実践でどのように活用できるのかを、演習を中心に実施。
- ▶実際の生成AI使用時の画面を映した説明動画や現役員長へのインタビュー動画など、コンテンツの種類を増やすことで継続しやすい工夫した。
- ▶1講座30分程度のコンテンツ、何度も見直すことができる設計とすることで、受講のハードルを下げた。

実施時の課題

- ▶生成AIの活用に関して、単なる知識提供ではなく、実際の幼児教育の現場でどのように活用できるかを具体的な演習形式で学べるようにする必要がある。
- ▶参加者のICTスキルに差があるため、初心者向けのサポート体制が求められる。

効果検証の手法

アンケート調査:受講者(現職者)

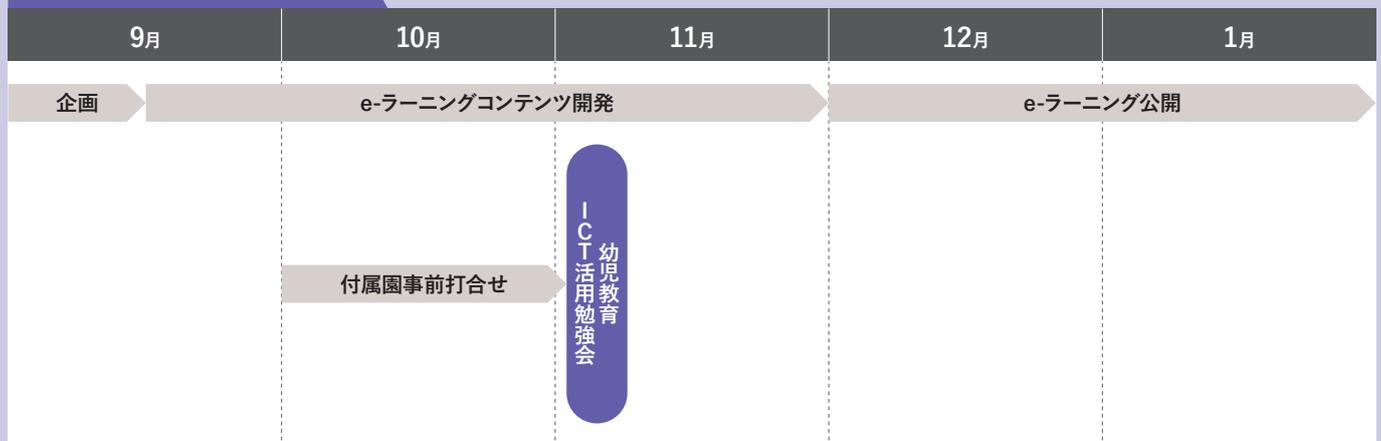
体制

大学:コンテンツ企画・制作
付属幼稚園:出演、制作協力

コスト

コンテンツ開発費:約300万円

スケジュール・Schedule



成果・Results

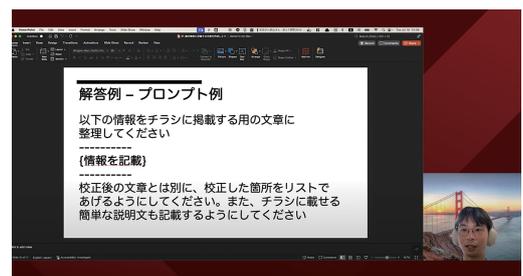

成果／見えてきた課題

- ▶「ご自身の業務で生成AIを活用できる機会は増えそうですか？」という設問に対し、受講者の約93%が活用を前向きに検討、うち約48%は活用し始めていると回答した。
- ▶生成AIを活用して感じたこととして、最も多く回答があったのは「自分だけでは思いつかなかったアイデアを得ることができる」であり、約92.6%が選択した。
- ▶個人での受講が可能なeラーニング形式の開発であったが、受講者のICTスキルやリテラシーに懸念がある場合は集合研修とすることが有効であることが分かった。


展開案

- ▶幼児教育×ICTを訴求することで幼稚園教諭等の数を増加させることにつなげられる一方で、1大学で実施するには限界があるため、大学間連携及び民間連携も含めプラットフォーム化の推進が有効であると考えられる。
- ▶連携大学をはじめとした関心をお持ちの大学に、提供も含めeラーニングコンテンツを展開していく。

成果物・Deliverables



実際のeラーニング講座の画面

「なるきょう めたばーす! 森のようちえん」 を中心とした発信プログラム制作

鳴門教育大学

課題背景

令和5年度大学等を通じたキャリア形成支援による幼児教育の「職」の魅力向上・発信事業にて構築した2Dメタバースは操作性において約8割の高評価を得たものの、未成年利用者の特性から、人権・いじめ対策、ネット依存予防のためのルール整備、セキュリティ強化、ジェンダーに配慮したアバターの多様化が課題として浮上した。これを踏まえ、生成AIの活用とゲーミフィケーション要素を導入し、機能拡張を図った。

取組概要

- ▶ 幼児教育・保育の専門知識を問うクイズ、「こどものつぶやき」コーナーの設置
- ▶ 生成AIを活用した幼児教育相談の試験運用、「Q&A」コーナーの設置
- ▶ 養成校生による幼児教育職の魅力発信
- ▶ 幼稚園教諭等向けセミナーの開催、研修映像や資料の情報提供
- ▶ 地域幼稚園等と連携したPR活動とキャリア支援、潜在幼稚園教諭等の人材発掘

参加者・役割

入園手続者(メタバース登録者)256名 ※令和7年1月27日現在

中学生 135名、高校生 16名、一般(幼稚園教諭等・養成校生・大学院生・その他等) 105名

実施時のポイント

- ▶ メタバース利用に際し、所属・氏名・メールアドレスによる本人確認を必須とした。また、誹謗中傷の禁止やプライバシーの尊重、利用時間遵守等の利用規約に同意を求め、安全で快適な環境維持に努めた。
- ▶ 利用時間を8:30~21:30に制限し、長時間利用を防止した。
- ▶ 高校生向けに専用アバター 4種類を用意し、一般参加者と区別可能とした。
- ▶ 一般参加者用として、ジェンダーに配慮した8種類のアバターを選択可能とした。
- ▶ 個別相談およびAI相談は、プライバシー保護のため独立した空間で実施し、相談内容の秘匿性を確保した。

実施時の課題

- ▶ メタバース利用にあたり、保護者同意の必要性や高校での利用制限により自宅からのアクセスが前提となり、利用率の低下を招いている。
- ▶ アバターやニックネームによる匿名性は、利用者間の不安要素となっている。
- ▶ 定期的なアクセスを促すため、イベント開催やコンテンツの継続的な更新が求められる。
- ▶ 幼児教育・保育相談において、傾聴的・応答的なカウンセラーの役割をAIに学習させることに課題がある。

効果検証の手法

メタバース利用ログの分析: マップへのアクセス数やコンテンツのクリック数など

入園者数の管理: オンラインフォームの設置

利用者評価アンケート: 利用頻度、利用時間、コンテンツ活用状況、利用による変化、満足度、自由記述など

体制

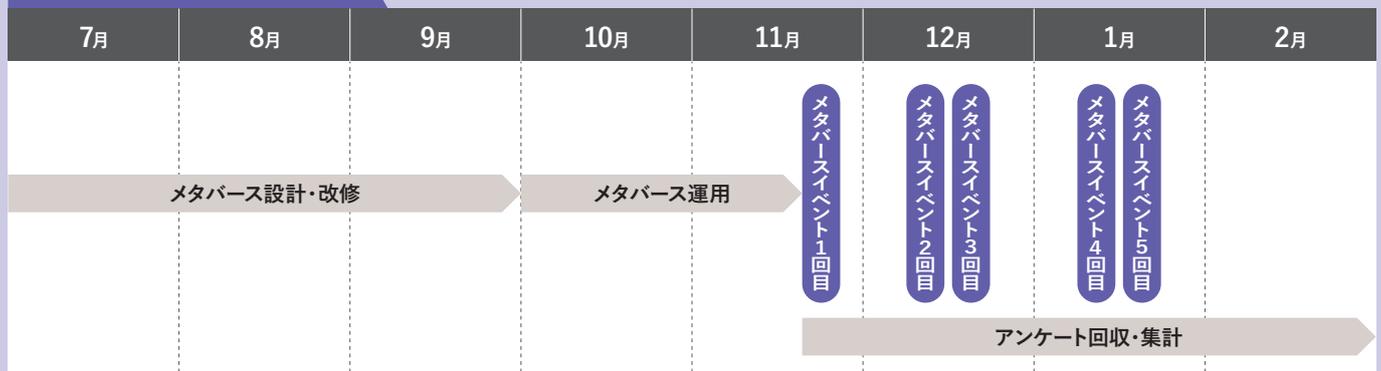
大学: 企画・運営、コンテンツ更新、相談業務など

連携・協力: 徳島県私立幼稚園(こどものつぶやき提供)、徳島県保育・幼児教育センター(Q&A集活用)など

コスト

メタバース拡張機能: 約450万円

スケジュール・Schedule



成果・Results



成果／見えてきた課題

- ▶「こどものつぶやき」「研修資料」コーナーの利用頻度が高く、「繰り返し見られる」「見た目がきれい」という点で高評価。
- ▶約8割以上の利用者が今後も継続利用を希望し、他者への推奨意向も約7割。
- ▶週あたりの利用回数及び1回あたりの利用時間が短いなど、十分な活用に至っていない。
- ▶「学生コーナー」「Q&Aコーナー」の利用頻度が低く、「リアルタイムコミュニケーション」「AI相談」の評価も低い。
- ▶周辺幼稚園等や自治体と連携したキャリア支援や潜在的な幼稚園教諭等の掘り起こしが困難。



展開案

- ▶高校生向けと一般向けの空間・機能を分離し、利用者ニーズに応じた設計を強化。
- ▶AI相談の学習データ拡充と専門家監修により、回答精度と信頼性を向上させる。
- ▶定期イベントの開催やコンテンツ更新で利用率を高め、連携機関との協働を推進。
- ▶キャリア支援を拡充し、潜在的な幼稚園教諭等の人材発掘を継続。
- ▶徳島県教育委員会総合教育センターや徳島県私立幼稚園協会のウェブサイトとリンクさせ、新規採用教員から園長に至るキャリアステージの研修コンテンツ、産・育休明けの現場復帰支援のコンテンツを提供。1月27日の協議会で、協力の快諾を得ている。

成果物・Deliverables

- ▶「なるきょう めたばーす! 森のようちえん」
©ARTORY



「なるきょう めたばーす! 森のようちえん」ここから各種コンテンツを利用できる

おわりに

総括

本パンフレットでは、幼児教育に関心を持つ者に対するキャリア支援や幼児教育の職の魅力発信に関してモデルとなる事例等を取り上げ、効果的なアプローチ方法について紹介いたしました。

「本事業での取組・成果紹介」では、特色や先進性のある取組について、アプローチ対象や手法ごとに分類してまとめましたので、採択大学の成果物とあわせてご参照いただけますと幸いです。

その際に、より広く深く「職」の魅力伝えるためには、特に次のポイントを踏まえて実施していただくことが重要になります。

- 正確な情報発信や「職」の魅力発信を行うことを通じて、中高生の保護者が持つ幼児教育・保育職に対するマイナスイメージを払拭することが、中高生の進路選択に影響を与えうる。
- 幼稚園教諭等の免許状・資格を有していない者(養成校生や社会人経験者)に対して、園とのマッチングの機会やリカレント教育の提供などのキャリア支援の働きかけを行うことも効果が見込まれる。
- 現職者・離職者への働きかけとして、人材紹介体制、研修制度、就職マッチング制度、就職後のフォローといった、就業に至るまでの一貫したサポートを行うことが効果的である。その際は、複数の養成校や近隣公共団体、民間企業等と連携し、広がりをもって取り組むことで、より一層の効果を発揮することができる。
- 取組を持続的かつ自走可能なものとするため、取組を外部に発信し、連携体制を構築することで、一定の規模を確保したうえで効果を見込める。
- 幼児教育・保育職を目指す学生に改めて目を向け、養成課程の中で日常的に幼児教育・保育を学ぶことへの楽しみや期待を感じられるような教育を提供できるよう、カリキュラムやプログラムを工夫する。

本パンフレットで示す「職」の魅力向上と人材確保の好循環を生み出すモデル案の実践及び拡大が、より多くの人材が幼児教育の道を志す一助となれば幸いです。

本事業主査からのコメント



内田千春 教授

東洋大学
福祉社会デザイン学部/大学院
ライフデザイン学研究科

幼児教育の「職」の魅力は既に各園の実践の中にあります。ところがその良さが社会に広く理解されているとは言えず、人材確保にも影響が出ています。本パンフレットは、こうした問題意識の下、地域性や規模、特色の異なる8大学が、様々なモデル事業を企画・実施した内容を取りまとめています。

読者は、他の幼稚園教諭等の養成教育を行っている機関を想定しており、カテゴリー分けされた取組ごとに、対象や準備・経費・成果など各事業を比較できるようになっています。地域、幼児教育現場、小学校から高校、教育委員会、地域の教育・保育団体、他の養成校等と共同して行った魅力的な事業が本パンフレットに記されています。

実際の出会いや経験を重視した企画もあれば、リーフレット、SNS、メタバースを生かした企画もあります。8大学は、交流型の企画を基盤にしながら、発信すべきコンテンツの作成に生かしており、そのコンテンツは他の養成校でも活用可能です。

本事業から私が学んだことは「広がり」と「つながり」を重視することです。養成校単独の取り組みから地域へ、さらに地域を越えた広がりをもたせていくこと、様々な世代や立場の人々がつながる取組が鍵になります。本パンフレットの内容を参考に、できることから幼児教育の魅力を広げる取組に参画していただきたいと思います。そして養成校が共に「職」としての魅力伝えることでメッセージが広がりをもち、幼児教育の理解を推進していくことを心から願っております。

問い合わせ先

文部科学省初等中等教育局幼児教育課 〒100-8959 東京都千代田区霞が関3-2-2

☎ 03-5253-4111(代表) ✉ youji-jinzai@mext.go.jp